

Title	日米開戦後における詩歌の動員と競合
Sub Title	Competing poems : the mobilization of shi, tanka and haiku in wartime Japan
Author	玉井, 清(Tamai, Kiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2021
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.94, No.10 (2021. 10) ,p.1- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20211028-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20211028-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 日米開戦後における詩歌の動員と競合

玉井清

## 序章

第一章 標語「軍神につづけ」と新聞の協調企画

第二章 戦時動員をめぐる詩歌間の競合

第三章 ラジオ放送を通じた愛国詩の朗読

第四章 「撃ちてし止まむ」の始動と朝日新聞

結語

## 序章

昭和一六（一九四一）年一二月の真珠湾攻撃による日米開戦以降、日本軍は、香港、マニラ、シンガポールへ進撃し、国内は戦勝気運に沸くことになる。しかし、そうした好況は長くは続かず、一七年六月のミッドウェーの海戦を転機に米軍の反攻が始まり、一八年に入ると、日本軍は太平洋のソロモン諸島にあるガダルカナル島からの撤退を余儀なくされ、戦局は悪化の一途を辿ることになる。こうした苦境を糊塗すべく同年三月一〇日の陸軍記念日を期して「撃ちてし止まむ」の国民運動が展開された。国内の戦意昂揚の維持、厭戦気運の抑制が図ら

れたのである<sup>(1)</sup>。この運動では、神武天皇の東征に際し詠まれた御製にある「撃ちてし止まむ」の文言が標語に採用され、新聞雑誌はもとより、ラジオやレコード、ポスターや絵画、映画や演劇など、あらゆる媒体が動員されることになる。敵米英の残虐性を強調するため、「鬼畜米英」に象徴される人種偏見を帯びた標語が活用され、それに類する文言や画像が日常に頻出する契機になったのも該運動の特徴であった<sup>(2)</sup>。

こうした運動は、第一次世界大戦の教訓としての「総力戦」の考えを淵源に持ち、軍事以外の、政治、経済、社会、文化、思想と、あらゆる分野の動員が推進され、文化と思想を担う文壇もその例外ではなかった。文壇の戦時動員は、統治者の側では日米開戦前に結成されていた大政翼賛会や情報局が主導し、内面指導を受ける文壇の側では日米開戦前は、日本文芸中央会、開戦後は日本文学報国会や大日本言論報国会が、その中核になることが期待され結成された。また、同時代の新聞雑誌を始め右に言及した種々の媒体も、関連企画を主催、あるいは協賛することを通じ運動を推進した。

本稿では、昭和一六年一二月の日米開戦から昭和一八年三月の「撃ちてし止まむ」の運動が始動するまでの時期に射程を置き、文壇の戦時動員の実際についての検証を目指す<sup>(3)</sup>が、戦時下において特に脚光を浴びることになる詩歌、「詩」、「短歌」、「俳句」の動向に考察を加える。この考察は筆者が目指す「撃ちてし止まむ」の運動下に表出した言論空間の特徴を浮き彫りにするための前史に位置付けられるため、<sup>(4)</sup>作品上に表出した「敵の描かれ方」に注目しながら検証を行う予定である。<sup>(5)</sup>

## 第一章 標語「軍神につづけ」と新聞の協調企画

日中戦争以降の戦時動員に際しては、運動を効果的に推進するため種々の標語が考えられ、掲げられることに

なる。冒頭で言及した「撃ちてし止まむ」は、日米開戦後における代表的標語の一つであるが、その前には「軍神につづけ」という標語も採択され、その元での企画が立てられ詩歌が動員された。文壇の戦時動員に際し、物資の紙不足の影響もあり、従前は文壇の主流を占めた「小説」が後景に退く代わりに脚光を浴びるようになったのが、短い文言で強いメッセージを送ることができる、「詩」、「短歌」、「俳句」であった。<sup>(6)</sup> 詩歌の戦時動員を象徴する「軍神につづけ」は、昭和一七（一九四二）年二月八日、日米開戦の大詔奉戴一周年を期して、大政翼賛会、日本文学報国会、新聞が協賛する企画であった。「軍神につづけ」の題目の下に新聞連載が組まれ、掲載された作品は大政翼賛会文化部編『軍神につづけ』と題する冊子にまとめられた。この企画については、同冊子の冒頭の「はしがき」の中で、大政翼賛会文化部長高橋健二が次のように説明している。<sup>(9)</sup> すなわち、大政翼賛会は、二度目の一二月八日を迎えるに際し、国民士気昂揚のための標語を日本文学報国会に委嘱し、選ばれたのが「軍神につづけ」であるとした上で

（大政翼賛会―筆者注）文化部としては在来とは異つた形でこの標語の精神を國民に傳へたいと思ひ、『軍神につづけ』といふ總括的題目の下に短歌と俳句と詩とを一流作家に作つて頂き、これを各新聞に連載することを企てた。それはもう十一月十日頃のこと、十二月八日をめぐすには日数も乏しかつたにもかかわらず、東京日々（毎日）が詩に、朝日新聞が和歌に、讀賣報知が俳句に、それぞれ連日貴重な紙面を割くことを快諾された。また作家側も文學報國會の詩部會長高村光太郎氏、同短歌部會長佐々木信綱氏、同俳句部會長高濱虚子氏の三氏、をはじめ各會の代表的作家が短時日の間に續々力作を寄せられた。その熱意は感激と感謝にたへない次第である。かうして十一月二十七日から右三紙の朝刊紙上に『軍神につづけ』といふ標語の下に約二週間にわたつて、それらの詩、和歌、俳句、が連載された。標語の新しい發表形式であると同時に、同一の企画に作家と新聞社が歩調を揃へた點で、一つの劃期的な企てであつたと言へよう。

と自賛していた。大政翼賛会文化部が主導し、日本文学報国会の短歌、俳句、詩の三部門が、『朝日』、『読売』、『毎日』と各々連携して実現した企画であった。同時代の主要三大新聞が同一企画の分担を引き受け、同一題目の下、紙面を割いて掲載した連載を一括所収したのが右の冊子である。<sup>(11)</sup> 冊子の最初には『朝日』が担当した短歌、一一人の三三首を、<sup>(12)</sup> 続いて『讀賣』が担当した俳句、一九俳人の五七句を、<sup>(13)</sup> 冊子の最後には『毎日』の担当した詩、一九詩人の一九篇を所収していた。<sup>(14)</sup>

そもそも大東亜戦争一周年を期しての企画であれば、前もっての準備も可能であったはずである。しかし、この企画は、一二月八日まで一か月を切る中で急遽立ち上がり、新聞の連載開始まで二週間の余裕しかなかった。冊子の「はしがき」が自讃しているように、大政翼賛会、日本文学報国会、主要三紙のメディア、三者による共同連携企画が短期で実現を見たのは画期的なことであった。日米開戦後、標語に象徴されるような短い語句による発信、新しい発現形式としての詩歌への期待が大きくなっていったことを物語っていた。また、「軍神につづけ」の詩歌動員企画が、時間的余裕のない中で立ち上がったのは、大東亜戦争一周年記念としては「愛國百人一首」の企画が先行し、その編纂に、情報局（第五部第三課）、大政翼賛会（文化部）、日本文学報国会（短歌部会）、新聞（毎日）が傾注していたためである。<sup>(15)</sup>

このように大政翼賛会が日本文学報国会に委嘱して選定された標語が「軍神につづけ」であった。日米開戦の緒戦を飾る真珠湾攻撃に際し、特攻作戦を担い殉死した兵士を「九軍神」と祭り上げた経緯もある<sup>(16)</sup>ので、同時代の日本人にとり「軍神」は印象深い文言になっていた。戦意を昂揚させ軍神に続くことが求められていたが、かかる標語は必ずしも流布しなかった。日時 of 近接を考えれば、翌一八年三月一〇日の陸軍記念日を期しての運動を象徴する標語として活用する可能性もあったはずであるが、それは見送られている。「軍神につづけ」ではな

く「撃ちてし止まむ」が改めて選定されたのは、後者が神武天皇東征の中で詠まれた御製の一節という出典の神聖さに加え、神武天皇が熊野の森の中で苦境に陥った際に発した言葉とされ、その後の東征成就につながったとの逸話が時局に合致すると考えられたためであろう。ガダルカナル島撤退という戦局悪化の中、敵米英への敵愾心昂揚を図りながら攻撃精神を強化することにより、逆境を跳ね返し戦局挽回が目指される状況は、神武天皇の東征と重ね合わせることででき、それは同時代の陸軍関係者による解説等からも窺うことができた。<sup>(17)</sup>したがって、「軍神につづけ」と「撃ちてし止まむ」は、日米戦争下、近接する時期に採用された標語ではあるが、両者が選定される背景や目的、標語に込めようとした意図には微妙な差異があり、その中に戦局や時局の少なからぬ変化を読み解くことも可能であった。

因みに、「撃ちてし止まむ」の文言は、昭和一八年三月の陸軍記念日を期して展開される運動に先立ち、日本の言論空間の中で散見されていた。右冊子『軍神につづけ』に所収された作品の中でも、後述するように佐佐木信綱<sup>(18)</sup>や、大木惇夫<sup>(19)</sup>の作品の中に見出すことができた。また、歌人の将軍と称され時代の寵児となっていた齋藤瀏は、自著『わが悲懐』の「あとがき（昭和一六年二月記）」<sup>(20)</sup>の中で、対米英宣戦の大詔が渙発されたことを受け「船の舳に御手打ちかけて大御神幸<sup>まか</sup>は征きぞ撃ちてし止まむ」、「ひさかたの天の御虚<sup>みそら</sup>ゆ大國魂<sup>おほくにたまめ</sup>天かけりまもる撃ちてし止まむ」、「天に日あり地に日本あり大御稜威<sup>おほみいつ</sup>向きなみすものは撃ちてし止まむ」と詠み、三首のいずれの下の句にも「撃ちてし止まむ」の文言を用いていた。同様に、齋藤茂吉も「何なれや心おごれる老大の耄碌國の撃ちてしやまむ（昭和十六年）」<sup>(21)</sup>「六千キロ七千キロの大戦線このいきほひに撃ちてしやまむ（昭和十七年）」と、詠んでいた。

さらに「撃ちてし止まむ」の文言は、レコードやラジオなどを通じて、国民の耳に届いていた。例えば、陸軍の蘭印への落下傘降下部隊を讃し、昭和一七年五月にレコード化されヒットした「空の神兵（落下傘部隊に捧

ぐ)の四番の歌詞の中に「讚えよ空の／神兵を神兵を／肉弾粉を砕くとも／撃ちてしやまむ大和魂(傍点筆者)」と登場している。<sup>(22)</sup>さらに、蔵原伸二郎が詠い、「撃ちてし止まむ」の運動が始まる前までラジオを通じ繰り返し放送された愛国詩「み軍に従いたてまつらん」の中にも「八紘にまつろはぬものみな／うち滅ばせと／ああ／うちてし止まぬ／うちてしやまぬ(傍点筆者)」の文言を見出すことができる。<sup>(23)</sup>

このように「撃ちてし止まむ」の文言は、詩歌を通じて、あるいはレコードやラジオ、映画館などで国民の耳に届いていたが、これに先立ち日米開戦一周年を記念して標語として採用されたのは、既述したように「軍神につづけ」であった。新聞に連載され、冊子『軍神につづけ』に所収された作品の多くは、いずれも日米開戦の緒戦、日本軍が快進撃を続けている渦中に創作されているので、皇国の勇姿を詠い、兵士や銃後の国民に戦うことへの確固たる決意を促すとともに必勝を誓う、あるいは殉死した兵士、英霊へ荣誉と追悼を捧げる内容になっていた。苦戦に陥っている戦況の作品への投射や、敵米英を殊更侮蔑的に描き、人種偏見を帯びた文言で形容する作品を見出すことは困難であった。

そもそも、作品の中に、敵が描かれること自体稀であった。冊子に所収された短歌三三首の中で「敵」との戦いへの言及があるのは、前述した佐佐木信綱の「まつろはず寇む國々撃ちて撃ちてし止まむ空に海に陸に」、<sup>(24)</sup> 逗子八郎の「わが戦艦敵爆撃圏に突入と雄々しさあまりわれは涙す」、<sup>(25)</sup> 松村英一の「敵基地に近く戦ひて大海にある凱歌を徒にしおもふな」の三首くらいであり、いずれも戦闘の中での客観描写に止まり、打倒すべき憤激の対象として「敵」が登場しているわけではなかった。さらに、同冊子に所収された俳句五七句に「敵」は出てこない。

詩は、短歌や俳句と異なり使える字数が多いので、前二者に比べれば敵を登場させる作品を散見できる。一九篇の作品の中で戦う敵の姿を見ることがができる作品の一節を紹介すると、安西冬衛は「眞珠灣頭たちまち紅蓮の

焰と天に沖し／ベンガル海上眞紅の火と濤を焼いて／ために敵膽をして寒からしむ」と書き、井上康文は「敵を撃滅せずば／死なじと、身も魂も／彈丸となり」と敵撃滅を誓う。<sup>(28)</sup>尾崎喜八は「粗大なりとも敵は頑強（中略）おもむろに我を縊らうとする。アラスカは彼が北方進路の橋頭堡、スエズ、西アジアは遙か枢軸遮断の壁、そしてソロモン、フィジー一聯の水域は／叩かれても叩かれても頭を上げる／敵が執念の南方突撃路だ（中略）敵がその龐大な生産力によりたのんで、／犠牲を厭はずひたすらに目ざすところは、／むしろ我が銃後戦力の崩壊にある。／思へば闘すでに血戦死闘の域に達す。」と、手強い敵が執念深く我が国の太平洋の領域に迫っている危機を強調していた。既述の太木惇夫は「月明かるバンタム灣の／眞夜中のかの戦（中略）敵味方それとわかねど／艦と艦あひ撃つや（中略）絶え絶えに、しかも叫びぬ、『あなたにこそ敵の地ぞ／踏まずして何ぞやむべき、この海に死するとも。』（中略）あらん血の一滴まで、仇をなすを、咎なすを／撃ち撃ちて、撃ちてしまな、たまきはるこのいのち」と、<sup>(30)</sup>インドネシアのバンダム湾における夜更けの困難な戦闘を描きながら敵との戦いを鼓舞していた。大木の作品が、戦闘を躍動的、具体的に描写していたのは、日米開戦後、海軍の報道班の一員としてジャワに派遣され帰国したばかりであったためであろう。<sup>(31)</sup>しかし、このように敵を相手にした戦闘を描く作品は必ずしも多くはない。また、たとえ敵が登場したとしても、自らの戦意を鼓舞することに主眼が置かれることが少なくなく、敵との戦い自体が作品の主題になっていたわけではなかった。野口米次郎は、真珠湾攻撃に参加して散華した甥についての詩を書いている。その一節に「十二月八日、詔勅に答へ奉る、／彼は第二次爆撃の指揮を承つた、／米艦の盲射砲火、否血染めのスコールのどん真中に突入した……／ああ、戦史は嘗てこの悲壮を知らなかつたであらう。／（中略）／國土一つに滅私奉公の総進撃、／悲壮な熱涙なしに私が使命達成は期せられない。／私は今日町の葬儀屋の前を通る、／匆忙漣花を擬造し、板を創り釘して棺桶を作つてゐる。／人間死なき能はずだ、日毎夜毎に亡骸は土壤へ急ぐ。」と、情緒溢れる言葉を紡ぎ、<sup>(32)</sup>



への追悼の念を著していたが、甥を散華させた敵米英は登場していない。したがって、敵への憎悪を掻き立てるための侮蔑の文言や、鬼畜米英に象徴されるような人種偏見を帯びた言葉を活用する作品を見出すことは難しかった。西條八十が「きのふまで七つの海に傲おこれる獅子たりし米英は、鱗隙かげきをうかがふ卑屈ひくつなる鼠となれり！」と詠い、米英を「鼠」に譬える事例は例外と言ってもよかつた。<sup>(33)</sup>

以上のように、「軍神につづけ」掲載の作品を通観すると、詩については、打倒すべき敵を登場させ戦意昂揚を目指す作品を、短歌や俳句に比し多く見出すことができた。その一方で、そうした詩の中で、敵との激闘を主題に置いた作品、米英への憎悪を殊更掻き立てる激情や煽情に溢れた作品、侮蔑的で人種偏見を帯びた文で敵を形容した作品は、多くはなく見出せたとしても例外であつたことを明らかにした。

## 第二章 戦時動員をめぐる詩歌間の競合

戦争が長期化する中、短い言葉で印象的にメッセージを伝える手法としての「詩」が脚光を浴びるようになったことを観察していたのは室生犀星であつたが、「詩」が時代の寵児になるのは日米開戦後のことであり、それ以前は「短歌」「俳句」が先行していると認識されていた。<sup>(34)</sup> 日米開戦前、室生によれば、「詩」は戦争に参与している詩人が少ないためか「手重い」作品を見ることができず、「小説」は、現地報告のような随筆はあるが見るに足るものは一つもなく戦争文学の入り口にまでも行っていないと断じていた。<sup>(35)</sup> 同様に、詩人三好達治も、日米開戦前、戦争を描くことにおいて「詩」の傑作のないことを難じていた。三好は大阪詩人倶楽部発行の『戦争詩集』の寄贈を受け通読したが感銘を受けるほどの作品は甚だ乏しかったとしながら「詩歌と稱する以上は時事を取り扱はうが戦争を對象として單なる抒情詩風のゆき方と趣を異にしようが、所詮は詩歌としてのかんどころの

一點をとり外しては相成るまい筈のところを、どの作品もその作品も、枝葉の叙事にかかづらはつて詩情の一貫するものを缺き、拙劣な散文の詩的形態を僭した悪詩非詩に墮してゐるのは甚だ見苦しく残念であつた。」と不満を記している。三好の見るところ、読むにたえる詩を書いているのは、織田旗男と火野葦平であるが、両者ともに出征中の「實戦者體驗者」であり、詩歌が銃後作者の空想裡の出産物としては無力平凡の域を脱することができないことを図らずも證している感があるとしていた。<sup>37</sup>前線を体験せず空想により実感を伴う戦争を描くことの困難を指摘していた。さらに三好は、戦争を描くことにおいて空想自由詩現代詩は融通無碍な重宝な詩形として、活躍活用されそうにも見えるが、一向目覚ましい成績を示していないのは、「新時代詩が最初の出發から内面的心理風景の探究再現を目睹してゐるその近代性の故に、やはり事實の報道力通報力を詩歌として缺いてい<sup>38</sup>る」ことに専ら理由があるのではないかとも解説する。近代日本の「詩」の内発を志向する特徴は、事実を描くことが求められる戦争詩には不向きなのではないかとの分析であつた。

因みに、こうした実感を伴わない空疎な言葉で紡がれた詩への容赦なき三好の批判は、北原白秋にも向けられていた。日中戦争勃発前の昭和一二（一九三七）年四月、朝日新聞社は、英国のジョージ六世戴冠を記念して、陸軍より払い下げられた試作機を使いロンドンまでの飛行を企画する。四月六日に日本を飛び立った神風号は、四月一〇日（現地時間、九日午後）ロンドンに到着、最短時間での欧亜連絡飛行を成功させる。それは、林銑十郎内閣が議會を解散し、総選挙が実施されることになる時期に該当したが、『朝日新聞』は選挙関連の記事を横に置き、日本の航空機産業の発展を象徴するものとして、自社機のロンドン到着の快挙を「神風号」の成功として大きな見出しで報じた。北原白秋は、その紙面に「遂げたり神風」と題する詩を寄せていたが、<sup>39</sup>三好は、この詩を「詩歌として何の確かな感銘もない淡くとして水の如き凡作である。」と断じたのである。三好は、北原の詩の中の「遂げたり鵬程」の一句を聞くだけで「背筋に悪寒の走るのを禁じ得ないのである。『遂げたり鵬程』

何といふ生硬な言葉だらう。『東の神風西へと勢へば』何という幼稚なお座なりだらう。『輝く銀翼轟く爆音』全くつまらない。『涙ぞどよめく同胞一億』實感の伴はない誇張ほど白々しい興の醒めるものはない。等々一句毎に私は不満を覚える。實際この作品は『遂げたり凡作』とでも云ひたいほどの出来栄である。<sup>(40)</sup>と、痛烈に皮肉っていた。もつとも、このように北原の作品を切り捨てた三好であるが、自分はこの種の「高潮詩」を書くことができるだろうかと自問し、自分もこの程度の凡作しか出来そうにもないと自戒する。『朝日』の紙上には、北原の作品に前後して、漢詩、和歌、俳句等の「祝歌」が掲げられたが、それらがいずれも例外なく、非詩、愚詩、悪詩の類で、北原の作品のみが拙劣なのではないとも書く。そこには、詩作する上での共通の陥穽があるとの見立てである。三好は、「神風讃」などということが、詩歌の題目として資質を欠いていると断しながら、「純粹の感興」が貴ばれてはいるが、切実な感興の外に、純粹な感興などない。この見易い真理を蔑ろにしているので、諸家の作品がお座なりの域を出ていないことになる。「深夜のラジオ放送を前にして『高鳴る感激……』といふやうなことは例の新聞記者の云ひ草で、そんなものは感激でも何でもない、それはただ無邪気な朗らかな好奇心の満足とでもいふべきほどのものではないか、それ位の内省―感情評価ができないやうで、詩歌も絲瓜もあつたものではない」と指弾する。さらに、こうしたことは、北原を始め知名の士ならば十二分に承知の筈に違いないしながら、彼等は「これらの非詩を非詩と承知の上で需要者の需めに應じられたものであらう。どうにも斷りきれないのでまあまあお茶を濁しておきました」とでも云つたところであらう」と、推断して<sup>(41)</sup>いる。この三好の北原批判は、既述の通り日中戦争勃発前であり、戦争自体を題材とした作品に対するものではないが、三好の言う「高潮詩」は、日中戦争後、さらには日米開戦後、普く求められるようになる。三好が危惧するように詩人はその需めに応じた作品を創作し、実感を欠いた「非詩、愚詩、悪詩」が乱造されることになる。「こうして三好の北原の作品に向けられた批判の鋒先は日中戦争後の「戦争詩」一般にも向けられ「悪詩非詩」

しかないとの結論に導かれていくのであるが、その認識は詩に「手重い作品はない」とする室生犀星も同様であった。<sup>(42)</sup> 室生は、戦時を描くことにおいて「詩」ではなく、むしろ「俳句」や「短歌」が先陣を切っていると観察し、次のように書いていた。「戦争が文學的分野にその影響を最初にあたへたものは、俳句と和歌においてであつた。その形式の單純と即時の吟詠に便である俳句は戰場にある人びとに依つて物され、和歌も比較的簡單な表現であるために戦中朗詠が物されるやうになつた。この二つの文學表現がいかに大衆的な文學形式であるかは、かういふ事變下にあつては、殊更によく手に取るがごとく解るのである。」と論評していた。<sup>(43)</sup>

前出の「軍神につづけ」の企画に「短歌（和歌）」や「俳句」の部門が動員されていたように、両部門は、「詩」よりもさらに短い言葉で発信することができる格好の手法であるとの期待を背景に先行することになる。さらに、「短歌」と「俳句」を比較すると、俳句は季題の挿入という制限があるのに比し、短歌にはそうした制約がないため戦争と戦争の周りを詠みこむ上で、その文學形式は闊達に働くと、「歌」の優位を指摘していたのも室生であつた。<sup>(44)</sup> 室生同様に三好も、日中戦争後、戦時を詠む作品の中での「歌」の優位と「俳句」の劣勢を次のように解説していた。まず「事變に関する詩歌、特に戦況戦闘戰場等を直接に歌ひ上げた詩歌としては、甚だ大雑把なことを言ふやうであるが、やはり短歌がその成績から見ても一等優れてゐるやうである。戦線俳句戦線短歌といふやうな言葉も既に諸方で用ひられてゐるやうであるが、この両者を比べてみても、やはり短歌の方が報道力通報力といふやうなものを詩歌としてさながらに備へてゐるので銃後の我々には如實に吟懐風景が眼前に浮び出てくる場合が多くて興味深い」と、事變を詠む上での短歌の優位を説いていた。これに対し俳句は「事實の報告的能力においては到底短歌の敵手でないやうに見うけられる。用字の數量からいつてもその點で歩の悪いはいふまでもないが、單にそれのみでなく、その性質からも本來主觀の打出に描寫叙述を驅使の仕方が象徴的なことから、その場合二重に勝手が悪い譯である。」<sup>(46)</sup>と、字数や表現様式の上で俳句は劣勢にあると分析していた。

こうした「歌」に比しての「俳句」の劣勢は、俳壇の側においても認識されていた。そもそも、戦時だけでなく平時においても、俳句は、浮世とは一線を画する世界に生きると考えられていた。俳句は社会生活から遊離した別世界に生き、文芸の中でも最も政治と没交渉、その極端な存在と一般に認識されていると指摘したのは俳人富安風生であるが、彼は、次のようにも説明する。俳人は「凡そ浮世離れした人種」、「宗匠頭巾に茶色の十徳、瓢箪を肩にかついで梅の木か何かを見上げてゐる人種」と見られ、俳人自身も世俗的無用人をもつて任じていたとする。俳句は「いはゞご隠居さまのおもちゃ<sup>(48)</sup>」と目されてもいた。したがって、時局には最も縁遠く、むしろ対極に位置すると考えられている。芭蕉の句「秋深き隣は何をする人ぞ」が、隣組の精神に反すると名士の講演の中で批判されたことを、<sup>(49)</sup>その証左として紹介してもいた。「秋深き隣は何をする人ぞ」が醸し出す、世俗と一線を画し日常がゆつくり流れる空気感、そこに「風流」を味わうのではない。隣りに無関心であり、隣近所で助け合う、相互扶助の隣組の精神に反する、時局に反する振る舞いとの論難が生まれる時代であった。

このように俳句が時局に即応できない存在として冷眼視されているとの認識は、従軍部隊に俳人が登用されていない事実からも指摘される。日中戦争勃発以降、大陸に文人が従軍部隊として送られ、その規模は各分野に拡大しているにもかかわらず俳人が加えられていないことに富安は焦燥を抱き、次のようにその不満を吐露していた。「一流文藝人を前線へ送つて、戦火の洗禮を受けしめるといふ考へは、國家總力戰の具現として内閣情報部の大ヒットであったに相違ない」と評価しながら、「當初の文士陸海軍部隊から漸次計畫が擴大されて、文士商工部隊が噂されたり、代表作家の種類も創作家詩人から大衆小説、脚本童話の作家、作曲家、映畫監督等にまで及ぶと聞くのは結構である<sup>(50)</sup>」と、その動員が拡大することを歓迎する。その一方で、「たゞ遺憾なのは、どの計畫からも俳壇人の名が洩れてゐることである。何故に俳句だけが、しかく継子扱ひをうけねばならぬのか<sup>(51)</sup>」と富安は嘆じていた。また「従軍部隊に一人の知名俳人がないのを誰も怪しまない」世間の認識にも、危機感を抱き

焦燥感を募らせていた。

富安は、俳句が戦争を詠うことにおいて他の詩歌に比し遅れていることを、日本文学報国会俳句部会の幹事長として昭和十七年度の事業報告の中で言及することになるが、同様のことを彼は、次のようにも書いていた。日米開戦の大詔を拝した感激は、詩や歌に詠い上げられ、国民の前に陸続発表された。朝のラジオの声に乗る詩や歌を聞く国民の胸に熱血が燃えたつに相違ない。「俳句だけが決してぼやぼやしてゐたわけではない、同じやうな立派な俳句が出てゐるのである。(尤も朗読されて電波に乗せられることは、結晶詩の性質上、俳句には至難である。)ただかういふじよめきに和する叫びとしては、派手な詩や歌に比較して、地味な俳句はたしかに損な立場にある。堂々と現はれて潮を吹き上げないから人の眼に立たないで、分がわるいといふことは争はれない。(53) (括弧送に乗らないことに焦慮し嘆息していた。(54)

確かに、日米開戦後、朝のラジオで放送に登場するのは「愛国詩」の朗読と謳われていたように圧倒的に詩人であり、これに若干の歌人も加えられていたが、俳人の出番は殆どなかった。(55) 富安は、高村光太郎が大戦争を詠んだ詩は、詩の素人でも感奮興起するが、それを俳句で行うのは難しいと次のようにも説く。師と仰ぐ高濱虚子が戦時を詠んだ俳句、「國民は驕らず」と題する「年はたゞ黙々として行くのみぞ」と、「至高至純」と題する「若草に老の涙は穢らはし」の二句を例示しながら、これらを詠んで俳句の素人が感動してくれるか甚だ疑わしいとする。「俳句は詩歌よりも、たしかに大きなハンディを背負はされてゐるのである」と認識していた。(56) したがって、「戦場に寄す」を主題とする企画があつた際も、それは俳句にとつては難題で「銃後國民のすべての人の一つの心を、十七字につづめて手紙にかへて訴へる、といふことにはかなりの手腕が要るのである。現に今度用意された諸大家の寄稿を見ても、正直のところ、何かの点でみなもの足りない」と、(57) 独白する。季題の制約に

加え十七音という短い文字の中に、戦争俳句を創作することの困難と限界を吐露していた。

俳人山口誓子も同様の認識を抱くようになるが、昭和一二年の日中戦争勃発直後、皆が戦時関連の作品を書き出した頃、彼は戦争俳句の可能性に期待を寄せていた。例えば、誓子は「戦争を詠うのに短歌と俳句とはいづれが効果的か」と自ら設問し、「短歌は三十一音、俳句は僅かに十七音を以て、感情を發露する點がちがひます。是が爲に、俳句の方が短歌に比較して、より簡潔で、より含蓄がありはしないか、又その結果讀者に迫る力がより鋭くはないかと考へられるのです。(傍点筆者)」と、短い音で尖鋭的な表現することに慣れている俳句の優位を説いていた。誓子は、齋藤茂吉がニュース映画を見て創作することの困難を「二重の間接」と論じていた<sup>(59)</sup>とともに反論し、ニュース映画のカメラマンは映画的なるものを目指しているので、カメラマンの気づかなかった題材を取り俳句に組み立てることは可能であると主張していた。俳句作家は「カメラマンの気づかなかった詩を窃み取るべきだと思ひます<sup>(60)</sup>」と、ニュース映画を見ての作句の可能性に期待を寄せていた。しかし、日中戦争勃発一年余を経た時点で、誓子は「詩は潛伏してゐるから問題にしないとして、短歌と俳句とは、いづれが戦争を詠ひ得たか。私はこの二つの姉妹芸術は、短歌が弾力的な象徴性を發揮するのに対して、俳句は尖鋭的な象徴性を發揮するものと考へてゐる。戦争短歌は既に、幾多の佳作を得てゐる。戦争俳句の業績が、今日のところ僅かにかくの如きものであることはいささかさびしいことである。」<sup>(61)</sup>と書き、焦燥感を滲ませていた。既述のように日米開戦後に脚光を浴びるようになる「詩」ではあるが、それ以前、戦争を詠うことにおいて「詩」は競争の視野の外にあったことを確認できるとともに、「俳句」は「短歌」に比し優位なはずなのに、「短歌」ほど佳作を生み出せていないことを嘆息していたことがわかる。こうした認識は、時代が下り日米開戦の過程でさらに深まり「俳句は、武人が感懷を托する詩としては、充分な詩ではない、短歌と比較すれば、その点は、程度の差に過ぎないやうに見えながら、程度の差以上に質の差になつてゐる。感懷を托するには律動の起伏が要る、言葉の廣表

が要る。残念ながら俳句にはそれが無いのである。<sup>(62)</sup>と、誓子は書く。戦時を詠む競争において、「俳句」は「短歌」に敗北し、その逆転は不可能であることを事実上認める一文である。期待を抱き実際に創作してみたものの、戦時関連の題材を俳句に乗せ傑作の句を創作することの困難さを痛感させられた、内心忸怩たる思いが滲み出た心情の表白であった。

このように戦争を詠うに際し「俳句」に比し優位にあった「短歌」であるが、そもそも筆者が注目する運動の標語となった「撃ちてしまむ」の文言自体、神武天皇の御製を出典としていた。<sup>(63)</sup>二・二六事件に連座した廉で禁固刑を受けた前出の齋藤瀏は、出獄後「歌人の将軍」との異名を得て、日米開戦前後を通じ、新聞雑誌上に露出することが多くなり一躍脚光を浴びるまでになるが、「歌」への、とりわけ「事變歌」への期待と需要が彼を時代の寵児にしたとも言える。前出の日本文芸中央会結成の動きの中、大日本歌人協会の理事として、新体制への即応と、思想的誤謬の是正を目指した解散勧告状を提出した経歴を持つ齋藤は、<sup>(65)</sup>同時代の中で短歌の役割について「従来世界情勢に疎く、自己陶醉に陥つてゐた歌人も今や明確に認識したと思ふ」、「短歌を戦勝の爲めの興奮剤の如く、即効的に役立たすことのみを考へてはなるまい。然し亦、此の國家存亡の際何処を風が吹くかと言つた無主義、無方針の我不開焉的のん気なものでは國家に対し相済むまい」と説く。<sup>(66)</sup>齋藤は國家観や世界観なき歌、個人主義や自由主義的生活に立った歌への妄信は國家に有害なので断乎排斥すべし、「高度國防體制は國民の一人も離脱を許さぬ。萬民各々その職分に奉公すべき要求を持つ。(中略)俺は歌人だと濟して奉公圏から離脱することは許されぬのだ。この際有つて何の役にも立たぬ短歌や、有つて何の役に立たぬ歌人なら、無き方が國家のためになる。況んや、有つて害になる短歌や、歌人なら速やかに除かねばならぬ。」<sup>(67)</sup>とまで書いていた。このように國家や社会から超然とした歌人の存在は許容されないと断じつつ、短歌を「即効性のある戦勝興奮剤」として安易に利用することは戒めながらも、世界情勢に関連した戦争の「歌」を國家が求めていること、歌



人はその期待に応える覚悟が必要なことを力説していた。こうした情勢下、「撃ちてし止まむ」運動に伴い、詩歌の動員も加速されていく。

### 第三章 ラジオ放送を通じた愛国詩の朗読

日米開戦後、「短歌」や「俳句」の後塵を拝していた「詩」が、立場を逆転させ脚光を浴びるようになったことは既に指摘したところであるが、「詩」が時代の寵児になるに際して重要な役割を果たしたのは「ラジオ」であった。<sup>(68)</sup> 周知の通り、一般に普及したラジオは、国民の戦意昂揚に大きな役割を果たすことになる。新聞は、日米開戦直後、朝のラジオから流れる放送の興奮を次のように伝えていた。

いつもの朗らかな朝のラジオ體操のメロディに代わつて八日朝のラジオは歴史的重大ニュースを聴取者達に送つた、午前七時、同十八分、同四十一分、八時卅分……、ひっきりなしに「大本營陸海軍部發表」と緊張した放送員の聲が朝の食膳に送られ、また出勤途次のサラリーマンの耳に打つた。「いよいよ始まつた！」決意は決まつてゐても國民の感慨はまた新しいものがある、「スイッチは切らないでそのまゝお待ちください」——緊張の連続である。ニュースとニュースをつなぐ音盤放送も「軍艦マーチ」と「愛國行進曲」など、勇しいメロディばかり、一億國民の士氣はいやが上にも鼓舞された。<sup>(70)</sup>

日米開戦を伝える一二月八日及び、それ以降は、ニュース放送が次のように増加することになる。

十二月八日、開戦第一報が午前七時の臨時ニュースによつて報ぜられてから、深夜十二時迄の臨時ニュースは實に十

二回、之に午前六時二十分から同夜十時迄の定時ニュース六回を加へ、八日のニュース回数<sup>(71)</sup>は十八回、四時間四十分といふ新記録を作つた。かくて放送番組面に於て、ニュースの優先が確保され、翌九日からは定時ニュースを午前六時、八時、十時、正午、午後三時、五時、七時、九時、十時、十一時と、聴取に最も便宜な時間の切れ目毎に一定し、更に十二日からは午前七時にも放送することになつた。之により、従来は午前二回、午後五回の、計七回であつた定時ニュースが、一躍十一回に増加した<sup>(72)</sup>（句点は適宜追加した―筆者注）。

右は、日本放送協会が編纂した『ラジオ年鑑 昭和十八年版』に見える記録であるが、同年鑑には、日米開戦以降、戦局を伝えるラジオのニュース放送が、国民の注目を集めたことと、その成果を次のようにも記していた<sup>(73)</sup>。

（前略）皇軍一度起つや、陸に海に空に忽ちあがる赫々たる大戦果は、これまたラジオ・ニュースによつて八繼早に報道され、これら捷報を全國民はいづれも血湧き肉躍る思ひで傾聴し、皇軍に對して無限の感謝を捧げたのである。ニュース放送がかくも國民の絶大の關心をあつめたことは、ニュース放送史上まことに特筆すべきであらう。（中略）放送形態では大本営から戦況の進展や大戦果の発表がある毎に「敵は幾萬」或は「軍艦マーチ」の勇壮な音楽をその前後につけ加へて放送し又大本營で録音した陸海軍當局の力強い発表の聲をニュース中に傳へて非常な効果を収めた。

送り手である日本放送協会の現場も、開戦の興奮の中、戦意昂揚に向けたラジオ放送を目指していたことがわかるが、その舞台裏を新聞は次のように報じていた。

電波陣をがつちり引き受ける聲の殿堂日本放送協會AKでは階上、戦時放送本部を特設、傳令は、放送スタヂオと本部との間を飛ぶやうに走る、臨時ニュースは刻々に放送されるのだ、「今からでも遅くはない」の名調子で謳はれた「兵に告ぐ」の中村元放送員（現告知課長）<sup>(74)</sup>もけふは一放送員に返つて詔書捧讀放送に活躍、勇壮なる行進曲のレコー

ドは、レコード室から全部動員され、放送の合間／＼にかけられる。<sup>(74)</sup>

このように日米開戦を機にラジオの番組も戦時編成に組み替えられていくが、そこには統治者側の内面指導があった。従前の番組編成は、放送審議会と番組編成会の組織により朝野権威の協力を仰いで行われていたが、昭和一四（一九三九）年七月に時局放送企画協議会が新設され、各部署の提案に基き監督官庁である内閣情報部と共に毎月番組編成の大綱を決定することになる。同一五年一二月、内閣情報部が情報局に発展改組されたことに伴い、放送事業は、技術面は逋信省、放送番組の指導監督は情報局により行われることとなり、放送協会の重要事項は両者の共同管理となる。<sup>(75)</sup>

こうした情報局の指導の下、日米開戦後の戦時版として番組編成の変更が行われることになるが、その一環として開戦後四日目の一二月二日より、朝のラジオ放送の中に「愛国詩」のコーナーが設けられ詩の朗読が開始される。<sup>(77)</sup>日米開戦前の朝六時二〇分の放送開始が二〇分繰り上げられ六時からとなり、従前設けられていた、青年に向けて建国精神滋養に資す話をしてもらう「朝の言葉」と題する番組が、一二月九日から戦時版として「國民の誓ひ」と題名が変更され、朝の七時三〇分から放送されることになる。一二日以降、この「國民の誓ひ」の番組の中で愛国詩の朗読が行われることになった。<sup>(80)</sup>「愛国詩」朗読初日である一二日の『讀賣新聞』のラジオ番組欄によれば、七時三〇分より「國民の誓ひ」で野村重臣が登場し話をした後、七時五〇分からの「愛国詩朗読」コーナーで、丸山定夫アナウンサーが、高村光太郎の「危急の日に」、野口米次郎の「宣戦布告」、長田恒雄の「感激の賦」を朗読することが予告されている。<sup>(81)</sup>因みに、この三名の詩は、日米開戦直後、いずれも『讀賣新聞』紙上に掲載された作品である。<sup>(82)</sup>前出の『ラジオ年鑑・昭和十八年版』は、大東亜戦争勃発後の放送番組として大きな足跡を残したものに愛国詩朗読があったとした上で、「毎朝、詩歌朗誦とともに、この愛国詩朗読はどん

なに銃後國民の士気を昂揚したか知れなかつた。作者として、高村光太郎、野口米次郎、三好達治といふ人々の名前は記憶されてよく、丸山定夫、中村伸郎、東山千榮子、山本安秀等の熱のこもつた朗讀によつて、それらの詩はよく生かされた。」と記している。<sup>(83)</sup> また、同年鑑の「放送番組改善に關する調査」の「演藝」の欄の中でも、「十二月十二日以来番組に取扱はれた愛國詩朗讀は、近來の出来ばえと賞賛され、國民文化の上にも大いに効果を齎した。」と、自讃とも言える評価をしていた。<sup>(84)</sup>

昭和一七（一九四二）年九月に日本放送出版協会が発刊した冊子『愛國詩集』は、右のラジオの「愛國詩」コーナーで放送された代表的な作品を所収していた。この冊子は、二部構成になっていて、第一部には、日本放送協会が直接委嘱し創作され放送された作品三六篇を、第二部には、新聞雑誌に一旦発表された作品から放送された三八篇を所載していた。<sup>(85)</sup> 既述の長田の「感激の賦」も所収されるが、一旦『讀賣』紙上に掲載された作品の放送であつたため第二部に配されている。

この『愛國詩集』には、複数の作品が掲載される詩人が少なからずいたのでそれを確認しておきたい。まず、五篇掲載されている野口米次郎が最多で一人だけである。しかも、五篇はいずれも第一部に、つまり日本放送協会から直接の委嘱を受け創作し放送された作品であることは特筆すべきであろう。四篇掲載しているのは、第一部に二篇、第二部に二篇の計四篇掲載している高村光太郎と尾崎喜八であり、第二部だけで四篇掲載されていたのは蔵原伸一郎であつた。三篇掲載していたのは西條八十で、第一部に二篇、第二部に一篇掲載されている。二篇掲載は多く、第一部に二篇掲載されているのは河井醉茗であつた。第一部と第二部に各一篇が掲載されているのは、佐藤一英、佐藤惣之助、三好達治、井上康文、前田鐵之助、坂本越郎、長田恒雄、西村皎三と八名いて、第二部に二篇掲載されているのは、室生犀星、近藤東、岩佐東一郎の三名であつた。日米開戦後、詩は脚光を浴びることになるが、同詩集に多くの作品が掲載されているのは、時代の寵児になつた詩人と言つてよいであろう。

特に、第一部に多くが掲載されている野口、高村、尾崎の三名に加え、前出の『ラジオ年鑑・昭和十八年版』に言及されている三好達治は、ラジオを通じての「愛國詩」朗読に向けた作品を創作し、戦時の潮流に乗って活躍した詩人として位置付けることができるであろう。

ところで、「詩」は、「短歌」や「俳句」に比し使える字数が多いので、作品の中で敵が描かれることが多くなことは冊子『軍神につづけ』の検証を通じて明らかにしたところである。こうした検証を参考にし、右の『愛國詩集』所収の作品についても考察を加えてみたい。ここでも、「敵の描かれ方」に注目し、①敵が登場しない作品、②戦う相手としての敵は登場するものの否定的形容が付随しない作品、③割かれる字数は少ないものの、敵に言及する中で否定的に形容する言葉を見出すことができる作品、④敵、あるいは米英への敵愾心を掻き立てる煽情度の高い作品の、四つに大別してみる。④については、多くの字数を割いて敵（米英）打倒を高唱する作品、よびかけや繰り返し、「！」の強調記号などを駆使しながら煽情的に米英への敵愾心を昂揚させる作品、さらに字数自体は少ないものの人種偏見を帯びた侮蔑的で尖鋭的言葉を用いることにより敵への憎悪を掻き立てる作品である。この分類に従うと、第一部の三六篇は、①九篇、②九篇、③五篇、④一三篇、第二部の三八篇は、①二二篇、②七篇、③五篇、④四篇になる。

これらの結果から、第一に、『軍神につづけ』の検証からも明らかにされたように、詩は短歌や俳句に比し多くの字数を割くことができるため、合計七四篇の内、敵が登場する作品、②③④の総計は四三篇になり、半数以上を占めていたことが明らかになる。

その一方で、第二の特徴として指摘できることは、「愛國詩」としてラジオで朗読された七四篇の詩であるが、①に属する三二篇、すなわち半数弱の作品に敵（米英）が登場していないことである。しかも、敵が登場しない①に属しながら、ラジオで繰り返し放送された作品が存在することに注視したい。むしろ、ラジオで繰り返し流

されたことを確認できる作品は、①に属する傾向が強いとさえ言うことができるかもしれない。<sup>(86)</sup> 例えば、第一部では、河井醉茗「眞住吉の神」<sup>(87)</sup>や長田恒雄「聲」<sup>(88)</sup>、第二部では、高村光太郎「最低にして最高の道」<sup>(89)</sup>、山本和夫「その母」<sup>(90)</sup>、尾崎喜八「此の糧」<sup>(91)</sup>、蔵原伸二郎「み軍に従ひ奉らん」<sup>(92)</sup>である。以下、敵が登場しない①に属しながら繰り返しラジオ放送されたことを確認できる、これらの作品を概観してみたい。

第一部の河井の「眞住吉の神」は、海上の安全を護る住吉の神を謳い、「神は住之江の浦に鎮りたまふ／昔ながらの松風に／聲あるのみ」で結んでいる。戦時の熱狂や絶叫とは一線を画す落ち着いた詩調の作品である。高村光太郎の「最低にして最高の道」は、小さな「利欲」「不平」「ぐち」「怒り」「薄汚い企み」「世の抜け駆け」を止せようと訴えている。その上で、見えも掛値もない裸のところで、らくらくと、のびのびと、空を仰いで大きく生きようと詠い、「泣くも笑ふもみんなと一緒に／最低にして最高の道をゆかう。」と結んでいた。日常の戒めとともに、前向きに、おおらかに過ごす生き方が説かれている。戦時下の国民への戒め、閉塞感漂う暗い時代ゆえに、前向きに明るく生きることを推奨した内容と見做すこともできるが、高村が多く創作した「愛国詩」とは異なり、戦時に限定することなく、平時にも通用する作品であった。以上二篇は、戦時との関連を明確には見出せない作品であった。

長田恒雄の「聲」は、声には、大小、高低、明暗、澄濁、種々あるとしながら、祖先からの声、すなわち「血（血統）の聲」に注目し、その声には二面性があるとす。すなわち、国の安らかな時、「撩亂たる花苑のやうに／美しく流れあふれ」、「しづかな汀の囁きのやうに／月の光のなかに融けいり／悲しみをいやし／くるしみをささへ」る声である。他方、国の険しい時は、「刃の如く鋭く／つんざき閃いた聲だ」、「荒れ狂ふ怒濤となつて／邪悪を滅ばし／世界を震撼させた聲だ」とする。このように聲には、平時と戦時に発せられる二種があると解説している。戦時に発せられる声の意義だけ強調しても良い時代に、敢えて平時の声の意義も説いていることに、

さらには敵を登場させず、そうした意義を説く作品が繰り返し放送されていたことは注目すべきであろう。尾崎喜八「此の糧」は、軍国の糧となつている薩摩芋を擬人化しユーモアを交えて描き、海のかなたで命をささげて戦う兵士を想起しながら、銃後の安全な場にあつて、すこやかな味、豊かな畑ものに、舌鼓を打つことができる有難さを詠っていた。食糧難から米の代用食としての芋への不満を封じる作品と位置付けることができるが、敵は不在で、敵愾心を昂揚させる内容ではなかった。山本和夫の「その母」は、前半で出征した息子二人を案じて武運長久を祈る母親の心情が、後半では「秋の椎の實が涙のやうにその母の頭上にこぼれた」と書くことにより二人が戦死したことを暗示している。母の懐には、戦地からの写真が増え、鉛筆で走り書きの消息には「みんなおどけてゐて阿保なことばかり書いてあつた。」と結ぶことにより、息子二人を喪つた母の悲しみが読者の涙を誘う内容になつていた。以上の三篇は、「聲」、「食糧」、「息子の出征と戦死」を通じ、「戦時」に関連したことを描いているが、銃後の日常生活が詠われ、敵と「戦う」ことが強調されているわけではなかった。

これらの作品と異なり、蔵原伸二郎の「み軍に従ひ奉らん」は、既述のように「撃ちてしまむ」の文言が見える作品であることから窺われるように、国民に「戦う」決意を鼓吹しながら攻撃精神を昂揚させる内容であつた。昭和一六年一二月八日の日米開戦の詔勅を拝し（大詔奉戴）「わが大日本國は／再び自ら照り明りたり、／雄たけびのこゑ／津々裏々に鳴りとよみ／山々をうごかし、谷々に木霊し、草木魚鳥らみな出で、躍りぬ／一天四海に／神のみこゑあり／八紘にまつろはぬものみな／うち滅せと／あ、うちてしまぬ／うちてしまぬよと／みことかしこみ勇ましく／わが丈夫は出でゆきぬ／萬里の大波をこえ／はげしき海流を潜り／乾ける熱帯をわたり／わが身わが血わが魂を／いまぞ捧げまつらむと／（中略）／日のくにの翁よ媪よ丈夫よ少女らよ／いぎやかへりみずして／このみいくさに従ひ奉らん」と詠っていた。

この蔵原の「み軍に従ひ奉らん」は、昭和一七年一二月五日、日比谷公会堂で開催された「大東亜戦争一周年

記念戦場精神昂揚大音楽会」でも、照井環三アナウンサーにより朗読され、清瀬保二が曲をつけ日本交響楽団により演奏された。同音楽会は、午後一時からの番組としてラジオ放送されたが、皇国日本の偉大さを讃えながら「ますらを」にいかなる困難をも乗り越え戦うことを、銃後の老人から少女まで、それに従うことが説かれていた。

以上のように「み軍に従ひ奉らん」は戦意昂揚を図る作品と位置づけることができるものの、ここでも敵米英は登場していない。他は、戦うことが謳われていないため、当然のことながら敵自体、登場していなかった。これらのことは、日米開戦後に繰り返しラジオ放送され朗読された戦意昂揚を図るための「愛国詩」は、敵愾心を煽るため敵米英への憎悪を掻き立てる煽情的な作品ばかりではなかったことを示していた。

第三に、第二部の新聞や雑誌の依頼で創作された作品より、第一部の日本放送協会から直接委嘱を受けた、すなわち最初からラジオ放送されることを前提に創作された作品の方が、煽情的に描く傾向があることを確認できる。第一部が、③五篇、④一三篇なのに比し、第二部は、③五篇、④四篇と、特に④に大きな差が出ていることは注目すべきであろう。日米開戦後、詩歌がラジオ放送にのるようになって、詩が俄かに脚光を浴びるようになったが、新聞雑誌のように「活字」ではなく、「音」を通じて視聴者に伝えるラジオは、より煽情的作品、三好の言う「高潮詩」を求め、作者もそれに応える創作をした結果と捉えることができるであろう。

以上を踏まえた上で、右の③④に類別された作品に注目し、敵（米英）がどのように描かれたか検証するとともに、戦意昂揚を図るため、敵愾心を掻き立てるため、いかなる文言が綴られたか確認してみたい。ここでは、総体として煽情度の低い傾向にあった第二部の作品の検証を行い、その後で高い傾向にあった第一部のそれへと考察を進めていく。

まず、第二部の③に分類した土井晚翠の作品は「英米あらびて寄するを見ずや、アジアの同胞十億餘萬、かれ



らの飽くなき非望に悩む（中略）A B C D 合圍は何か、一億一心われらの努力、鐵壁微塵に碎かてやまし」と、<sup>(94)</sup>  
 日本が一億一心戦うのは、乱暴であくなき「非望」を有する米英であり、我が国には十億余のアジア同胞を救う  
 使命があると詠っていた。村野四郎は「逆巻く太平洋の怒濤のただ中に／ガラガラと崩れ墜ちる／悪徳の牙城／  
 立てよ、神の裔／今こそ妖魔撃滅の時」と、<sup>(95)</sup>丸山薫は「欺瞞の文明、搾取の繁栄／米英資本の影映せる蜃気楼は  
 ／わが旭日の意慾の前に消え失せたり／わが旭日の理想の前に消え失せたり」と、<sup>(96)</sup>相馬御風は「醜の醜草薙ぎつ  
 くし／魔のことごとく打ちひしぎ／拂ひ浄めて大東亞／安く清しく治まらん」と、各々詠んでいた。米英のアジ  
 ア支配は、「悪徳の牙城」「妖魔」、「欺瞞の文明」「搾取の繁栄」、「醜の醜草」「魔」と形容され、その打倒が誓わ  
 れている。西條八十の作品に見える「遅しきアメリカの息の根は塞められたり！」の一節は、<sup>(98)</sup>敵の米国への表現  
 に特段の形容を見ないものの、「アメリカの息の根は塞められたり！」との絶叫表現に煽情度の高さを見出し③  
 に分類した。

第二部の④は、三好達治の「メリケンのかげの提督／やうやくに眼ざめし頃は／戦ははや決したり／（中略）  
 寄せがたきあたのいり海」と、<sup>(99)</sup>中西悟堂の「ラジオはいましたが／マレーの、香港の、ルソンの、ビルマの／皇  
 軍疾風の戦況をつたへてゐるたが／早くもA B C Dの鎖が寸断された／（中略）アングロサクソンの暴慢と吸血  
 は一週間まへまでの昔語り。」<sup>(100)</sup>の一節に各々見える、「メリケンのかげの提督」と「アングロサクソンの暴慢と吸  
 血」に、敵米英への侮蔑表現としては煽情度の高さを看取できるであらう。

長田恒雄は「驕慢な劫掠者の手から／紺碧の太平洋を解き放ち／ながい ながい忍苦の日から／アジアの民十  
 億を救ふために／つひに／峻烈なる火蓋は切られた／（中略）火炎の柱のなかに 偽善の假面は弾けとんだ」と  
 詠う。<sup>(101)</sup>この作品は、既述したように日米開戦直後に『讀賣新聞』紙上に掲載され、愛国詩の朗読コーナー初回の  
 一二月一二日に放送された作品である。敵米英を名指ししていないものの「驕慢な劫掠者」と形容し、真珠湾攻

撃により「偽善の假面は弾けとんだ」と煽情的に描いていた。岩佐東一郎の作品は、敵米英への攻撃をより侮蔑的表現を用いて描いている。すなわち「君は心おこれる米英どもへ／薔薇のはなびらを散らすが如く／機銃掃射の快腕を示し／巨大なる種子の如く爆弾の贈り物を撒きつづけ／敵地到るところに／爆煙の美しき花畑を創つたのだ／かの英吉利の貴族どもは／狐狩りの傳統を娛んだが／いま海洋を逃げ惑ふ汝らの艦船は／瘦せた狐より惨めな姿である／（中略）／世界の汚濁を浄めて止まぬ／これらの新しき天使たちは／汝らのバイブルには存在しない／」と詠っていた。<sup>(102)</sup> 敵米英を「心おこれる米英ども」「かの英吉利の貴族ども」と粗野な接尾語を使い表現し見下している。敵への攻撃を「機銃掃射の快腕」と擬人化するだけでなく、「巨大なる種子の如く爆弾の贈り物を撒き、敵地に「爆煙の美しき花畑を創つた」と、爆弾投下を「種蒔き」と表現しながら、その結果を爆煙の「美しき花畑」と比喩を用いて表現している。さらに、英国がアジア民族を獣視し、虐待したとの歴史を、同国貴族の「狐狩り」に準えながら、しかし、日本軍の進撃を受け、今では立場をかえ海洋を逃げ惑う英国艦船をして「瘦せた狐よりも惨めな姿」と蔑み、「新しき天使」の日本は「世界の汚濁を浄めて止まぬ。」と強調していた。

以上、第二部の③④に類別される作品には、憎悪や侮蔑を纏う文言により敵米英を形容しながら、その打倒を高唱する作品を見出すことができた。続いて、第一部の③④は、第二部の③④より、作品の総数とともに、割かれる字数や、その内容からも煽情度の高い作品が多く並ぶことになる。以下、その点について考察を加えてみたい。

まず、第一部の③の作品については、白鳥省吾が「米英の不正不義を憎み<sup>(103)</sup>」、堀口大學が「彼等英米蘭人の利己と非道の搾取をば われ等の土地から追ひ拂ひ われ等もろ共に榮えて行かう。」<sup>(104)</sup>、勝承夫が「地上の一切の邪悪をうち懲し」と詠っている。<sup>(105)</sup> 野口米次郎は、敵を倒す「彈丸」を「彼」と擬人化しながら次のように戦意昂

揚を図る作品を書いていた。「弾丸は、命中を誓つて喰る……、／（中略）／敵は慄き恐れ、周章狼狽、ぱつと倒れ、血に滲む、／（中略）／弾丸人を斃すに自分を亡ぼしてかゝる。／（中略）／彼（弾丸）は叫ぶ『私慾をほしいままにして天を恐れざるもの、一擧殲滅あるのみだ、』と結び、自らを「弾丸」に準えながら敵撃滅への堅い決意を誓っていた。<sup>(106)</sup>西村皎三は「見せかけの人道／嘘つ八の正義／そんなものはとうの昔から知つてゐた／知つてはゐるが／決してこけおどしの力なんぞに屈したわけではない！」と、敵の偽善に抗する文言を綴っていた。<sup>(107)</sup>

第一部の③以上に煽情的作品として分類した④には、一三篇の作品を見ることができ、それらの作品を、以下、戦局の推移を中心に追いながら紹介してみたい。まず、同冊子に所収された少なからぬ作品は、日米開戦直後に放送されていたこともあり、真珠湾攻撃により日米開戦の火蓋が切つて落とされたことを詠う内容が多い。敵米英、あるいはその指導者を名指しで取り上げながら敵愾心を煽る内容を書いたのは、前田鐵之助、三好達治、深尾須磨子であった。

前田は「十二月八日」と題する作品を寄せ、「昭和十六年十二月八日！／敵はアメリカ。／イギリス。人類の敵、まこと、我等が臥薪嘗胆の敵。／世界戦争の挑撥者、搾取の王。（中略）あはれ、はつしと打ちし暁の大奇襲戦／ハワイ灣頭、アメリカの醜の主力艦隊／撃ち沈められ、撃ち沈められて、また残るなし。（中略）敵なす敵はちりぢりに打ち拉<sup>ひ</sup>がれぬ。（中略）敵はアメリカ。／イギリス。人類の敵、まこと、我等が臥薪嘗胆の敵。／世界戦争の挑撥者、搾取の王。／飽くこと知らぬ貪欲の民、我等が敵。」と指弾していた。<sup>(108)</sup>敵米英を名指しして「我等が臥薪嘗胆の敵」「人類の敵」「世界戦争の挑撥者」「搾取の王」「飽くことを知らぬ貪欲の民」と種々の文言を繰り出しながら敵愾心を煽るとともに、真珠湾攻撃を称える作品を書いている。

真珠湾攻撃に関して、三好達治は、「アメリカ太平洋艦隊は全滅せり」と題する作品の中で次のように書いて

いた。<sup>(109)</sup>

「ああその恫喝／ああその示威／ああその経済封鎖／ああそのABC線／笑ふべし／脂肪過多デモクラシー大統領が／飴よりもなほ甘かりけん／昨夜の魂胆のごごとくは／アメリカ太平洋艦隊は全滅せり！(中略) あその凡庸提督キンメル麾下の艦隊は／一夜熟睡の後／かしこ波しづかな眞珠灣内ふかく／船艦含みて沈没せり(中略) 日東眞男児帝國／一たび雷霆の軍を放つや／彼らの潜水艦はとこしへに潜水し／彼らの航空母艦は鞠躬如として遁走せり／而してその空軍の百千の燕雀もまた／空しく地上に格納庫中に炎上せり／笑ふべし／脂肪過多デモクラシー大統領が／飴よりもなほ甘かりけん／昨夜の魂胆のごごとくは／アメリカ太平洋艦隊は全滅せり／然り／無用の兵を耀かすもの／必ず滅ぶ！／速かに彼らはその價をもて一の金言をあがなひて／而して／咄／我らの海洋の外に立去るべし！」と詠っている。

ABC包圍線で経済封鎖の恫喝をかけてきた米国であるが、見通しの甘い間拔けな指導者に率いられているので、アメリカ太平洋艦隊は全滅し航空母艦は遁走した、と日本軍の戦勝を煽情的詩調に乗せ高唱していた。表題の「アメリカ太平洋艦隊は全滅せり！」を、作品の中で二度繰り返して、日本軍の攻撃の前に、全滅、あるいは退散する米軍の弱さが印象づけられている。米国を笑い、徹底的に見下す視線は、「凡庸提督キンメル」や米国大統領ルーズベルトを「脂肪過多デモクラシー大統領」と揶揄する表現に典型的に示されていた。この作品の中で三好は「脂肪過多デモクラシー大統領」の文言を二度使っているが、「脂肪過多」には、アメリカのリーダーの節制や緊張感の欠如が、「デモクラシー」には、戦時に弱いアメリカの思想や制度が含意されていた。

深尾須磨子は、敵米英を名指ししながら、彼等が日本を見下していることに反発する文言を綴ることにより敵愾心を煽っていた。深尾は、米英が日本を侮蔑する最大の理由は、日本を持たざる国と見做しているから、と考へ次のように書く。すなわち「敵は持てるもの／持ちて傲れるもの／心よこしまなるもの／弱きを虐ぐるもの／

弱きを虐ぐるもの／我ら持たざるもの／持たずして心直なるもの／弱きを助け強きを砕くもの／俯仰天地に愧ぢざるもの（中略）ここに米英の膺懲に起つ／洵に已むを得ざるなり（中略）敵は物慾に溺れしもの／快樂に痺れしもの／古きに據りて新しきを拒むもの／大に擁して小を蔑むもの（中略）とする。

持てる敵は奢り、物欲に溺れ、快樂に痺れ、新しきものを拒む。よこしまな心を持ち、弱きを虐げる、大にして小を蔑む。したがって「かつて米英の謂ひけらく／『東邦日本は國家なりやいなや／國是となすべき鐵もなく石炭もなく／苛性曹達も石油もまた有色金屬もなく／國家と稱するはをこがまし／これぞ正しく一塊の土なり』と／さなり／そは持たざる國なり（中略）まこと傲れるもの／の眼には／一塊の土にも似たらんか／さもあらばあれ／實にもいみじきかな／一塊の土！／（中略）／かつて夷敵に瀆されざりしもの／祖國 われらの日本！／（中略）／われら今／虐げられし同族の民十億を抱きて起つ／（中略）／あはれ髀肉の歎き幾年／撃滅の意氣澎湃として漲るところ／一億の心熱鐵となりて合するところ／邪よ／退れ！」<sup>(10)</sup>と叫び結んでいた。資源があり傲慢な米英は、資源のない、持たざる国である日本を國家とは見做さず、「一塊の土」に過ぎないと蔑んでいる。しかし、その日本は、一度も潰されたことがない。その日本が米英という「邪」を追い払うため、アジア十億の同族の民のために立ち上がった、と詠んでいた。

以上、三詩人は、多くの字数を割き、敵国としての米英、あるいはその指導者を名指ししながら、ラジオ放送で朗読されることを前提に、戦意と敵愾心昂揚を促す目的の作品を創作していた。<sup>(11)</sup>

ところで、冊子『愛國詩集』の第一部と第二部の冒頭を飾る詩人は、日本文学報国会の詩部会長高村光太郎であった。室生犀星からは「既成詩人のただひとりの生き残りの猛者」と揶揄されるほど、<sup>(12)</sup>戦争詩、愛國詩を書いていた高村は、既に紹介したように『愛國詩集』には、四作品が掲載されている。

第一部の冒頭、文字通り冊子『愛國詩集』の冒頭を飾る高村の「彼等を撃つ」と題する作品の中では、真珠湾

攻撃を念頭に置きながら「大敵の所在つひに發かれ／わが向ふところ今や決然として定まる。／間髪を容れず／一撃すでに敵の心肝を盡くせり。」と詠う<sup>(11)</sup>。敵の打倒を説く際、米英を名指ししない場合が少なくないが、この高村の作品も名指しが避けられている。しかし「大敵」「敵」、さらに題名にも登場する「彼等」が、米英であることは自明であった。「八十梟帥のとも遠大の野望に燃え、その鐵の牙と爪とを東亞に立てて／われを圍むこと二世紀に及ぶ。／力は彼等の自らたのむところにして／利は彼等の搾取して飽くところなきもの／理不盡の言ひがかりに／東亞の國々ほとんど皆滅され／宗教と思想との摩訶不思議に／東亞の民概ね骨を抜かる（中略）わが力いま彼等の力を撃つ／（中略）彼等の牙と爪とを撃破して／大東亞本然の生命を示現すること、これわれらの誓なり」と高唱する。二世紀に及ぶ米英のアジア支配は、理不尽ないがかりをつけながらの鉄の牙と爪によるあくなき利の搾取であり、その結果、東亞の國は壊滅させられ、思想と宗教で骨を抜かれたと訴える。米英の牙と爪を撃破することが誓われていた。

敵米英を登場させる前田、三好、深尾の作品と異なり、この高村の愛国詩のように敵としての米英を名指しせず敵愾心を掻き立てる作品は多く創作された。角田の「正義の前にのたうつものは敵だ！我の正しい眼に彼の貪婪な煙幕は／もはや無駄だ！（中略）敵機の忽ちもんどり打つのを！／海を見よ！／敵艦の矢庭に藻屑となるものを！」<sup>(12)</sup>と絶叫する作品も、その典型であろう。敵は「貪婪な煙幕」を張るが、日本軍の攻撃の前に、「のたうち」、「もんどりうって」、海の藻屑に消えると煽情的に描写するが、米英への名指しは回避されている。尾崎は「謠詐謀をめぐらして狂奔するのは誰か。暴慢力を憑んで恫喝を弄するのは誰か。深海底の地殻の憤激、山巔の雪にうづもれた沸々の烈火、洋は太平でも大日本は火の國だ。」と書いている<sup>(13)</sup>。「謠詐謀をめぐらして狂奔するのは」「暴慢力を憑んで恫喝を弄するのは」、「誰か」と問いかける作品であるが、同時代の中で米英であることは自明であった。

このように真珠湾攻撃を契機に開始された日米戦争の目的は、西欧列強による苛烈なアジア支配を打破し、その支配からアジアを解放し救済することであり、日本はその使命を担っていることが強調されたが、そうした主張は詩作にも反映されることになる。打倒すべきアジア支配者であった西欧列強に批判の鋒先を向け、その非道ぶりは種々の文言で繰り返し説かれることになるが、ここでも米英への名指しは避けられる傾向にあった。敵米英に直接言及せず、亜細亜の歴史を繕きながらその非道を印象づける典型的作品を創作したのは、神保光太郎であった。<sup>(17)</sup>「亜細亜！／愛する亜細亜！／亜細亜は今起つ！」を繰り返す中に、異なる三行を挟み込む。それが八連により構成された作品である。したがって、同一作品の中で「亜細亜！／愛する亜細亜！／亜細亜は今起つ！」は、一六回繰り返されている。挟まれる三行には、「しいたげられ 鞭うたれ／しほりとられ／傷だらけになつた亜細亜」、「亜細亜の宿命とは何か！／はぎとられ はづかしめられ／なほ岩の如く動かざりし亜細亜！」、「亜細亜を裏切るものは誰ぞ！／亜細亜に齒向ふものは誰ぞ！／討つべし！彼ら！亜細亜の敵！」、「亜細亜は未だ滅びず／聖なる亜細亜を猿の跳梁ましらより救ふもの／あゝ亜細亜の日本」と、煽情的な文言が綴られている。亜細亜を救うのは日本であることが最後に強調されるが、その前には虐待されてきた亜細亜の歴史が繰り返して語られていた。虐待の主についての言及は一切ないが、同時代の中で読めば、西欧列強であることは自明であり、「猿の跳梁」との文言も使い、結果として米英への憎悪が掻き立てられる内容になっていた。

以上は、日米開戦の緒戦、真珠湾攻撃の成功に歓喜する中で創作された作品が多いが、その後の日本軍の快速撃に従い、創作された詩も所収されている。日本軍が陥落、占領した具体的な戦局に関連した詩のためか、以下紹介するように敵である米英を名指ししながら敵愾心の昂揚が図られている。

真珠湾攻撃を成功させた日本軍は、昭和十六年一二月末には香港の英国を降伏させ占領する。この香港占領を受け、西條八十は次のように書いている。<sup>(18)</sup>冒頭「ビクトリア・ピークのほに攀りて、／早春、すみれを摘みしことあ

りき、／その花、うつくしき紫なりしかど、／根より、莖より、悲憤の赤き血は流れぬ。」と、香港の地に悲憤の情を垣間見た過去の記憶を辿りながら、続けて「英人らの山莊へと、重き轡かじになふ／苦力クリーの裸あらはなる背せなには、白日のもと、三條四條みちすよすぢ、なまなましき鞭あの痕あとありき。百年の悪夢、いま覚めて／あ、香港全島を埋むる日章旗！」と紡ぐ。香港で、苦力の背中に英国人に鞭打たれた跡を見たことを前提に書かれた西條の作品である。日本軍の香港占領により全島に日章旗が翻り、彼等苦力も百年の悪夢から覚めることとなる、と喝采していた。

翌一七年一月、日本軍は、新年早々にマニラを占領するが、野口米次郎は次のように詠っている。「陰謀の牙城崩る、マニラ陥つ、／長き脅威の日終れり、／鐘を打ち、永へに侮辱と圧迫を葬らしめよ。／八十年の隠忍自重、我等誇るにあらず、／蹶起一番、彼等の野望を絶ち、／敵性行為遂に封じられたり……／見よ、三番目の血祭り、マニラ落つ！／我等高らかに天業を構へざるべからず、／國拳る総進撃、南へ南へと開始せられたり、／今や天下の公道より 傲慢無礼を駆逐する時來れり。／（中略）／汝死せるマニラ、阿諛と恫喝に弄ばれたり！／米國の玩具！／汝憐れむべき生贄／富と策謀に身を亡ぼせり。」と叫んでいた。マニラ占領は、「真珠湾」「香港」に続く、三番目の「血祭り」と表現している。この「血祭り」の文言には、野蛮に流れる精神を読み解くことが出来るであろう。また、米國のフィリピン支配を「陰謀の牙城」「長き脅威」「侮辱と圧迫」「彼等の野望」「敵性行為」「傲慢無礼」と形容する。さらに、マニラを玩具のように弄んできたと米國を名指ししながら、富と策謀に溺れたマニラは、米國の阿諛と恫喝に弄ばれ、憐れむべき生贄となり身を亡ぼすことになったとする。後段において、フィリピンが、解放を叫び隣人である日本に力を乞うなら独立の夢は叶うとも詠っているが、それは、日本の優越的地位を漂わせながらのアジアにおける日本の使命の喧伝であった。

真珠湾攻撃と並行してマレー半島に進撃した日本軍は、昭和一七年二月、シンガポールを陥落させる。大英帝國が誇るアジア要衝の地であるシンガポール陥落については、真珠湾攻撃同様、国内に歓喜を生む。シンガポー



ル陥落については、高村光太郎、野口米次郎、佐藤春夫の作品が、いずれも第一部に所収されている。日本放送協会は、シンガポール陥落をめぐり、第一次戦捷祝賀日(二月十八日)として、全番組を挙げて祝賀記念番組を特輯していた<sup>(120)</sup>。同協会は、シンガポール陥落をめぐる作品を「愛国詩」のコーナーで朗読するため、三詩人に委嘱していたことになる。

まず、撃滅されるべき英国についての形容を確認してみたいが、高村は「シンガポールが落ちた／残虐の世界制覇者をつひに破った。／シンガポールが落ちた。／傲慢なアングロ・サクソンをつひに駆逐した。」と書く。英国は、「残虐の世界制覇者」、「傲慢なアングロ・サクソン」と形容され、同国への憎悪が掻き立てられる。

野口は「シンガポール要塞四平方哩を蔽ふ、／セメント百萬噸の大集積、／汝亞細亞の億兆資財を虚栄と威嚇に濫用せり、／汝狡智を総動員して西太平洋に嘯いたり。／平和と正義を無視するもの、我等の亞細亞を奴隷視するもの、／今日本の天誅、よく汝偽善者の假面を剝ぐ、／我等共存共栄の時、今日を期して始まる。／汝英米の掠奪者、不倫の凡てを捨て、／百年の罪科を謝して身を清める時だ。」と、詠じていた。敵米英を「汝」と表現しながら、「偽善者」、「掠奪者」とする。その上で、亞細亞の資財を虚栄と威嚇に濫用し、狡智を駆使し西太平洋で嘯き、平和と正義を無視しアジアを奴隷視してきた。その英国に日本は天誅を下しその假面をはぐ。英国は、不倫の凡てを捨て、アジア支配百年の罪科を謝罪し身を清めるべきと説いていた。

佐藤春夫の作品は、シンガポール陥落に先立ち、同地へ向け進撃する日本軍を詠っている。英国を名指しこそしないものの、煽情的な文言を多用して敵愾心を煽る作品であり、その一節を紹介すると次の通りである。「(前略)南へ南へシンガポールへ／目標を目ざして刻々に迫り行く。／海賊の子孫どもの商人が／ここに植ゑ付けた不正の密林地帯を／今、まごころの大鎌で拓くのだ。／理由もなくつながれた足枷や手枷の重い鎖は／みなづたづたに切りほぐし解き放つ／奴等の建てた街も文化も組織も制度も／みんな偽善だ、白く塗られた墓原だ。／潔

癖な我等は巧みな偽と／見かけ倒しのごまかしとをまつとうに悪み／我等の軍靴に蹴ちらかし、ふみにじり、ふみしだく／ゴム園の草木も伏しなげけ／奴等の手になつた舗装道路も橋梁も砕けよ／逃げる序の手つだひ仕事にみなぶちころして行くがよい。／うそつきのから威張の卑怯ものどもよ。／紳士面のけちな無頼漢どもよ。／正義のはやてだ。まごころのいくさだ。／我等は奴等のすべてを許さぬ／しかしながらジャングルの鱔よ／毒蛇よ怪鳥よ猩々よ、心静かに聞け／我等は汝等も怖れない、また憚らない。／故に汝等を徒らに傷けぬ。／おれたち鐵牛は魔物ではない／正義の戦だ、光の嵐だ。まごころの大鎌だ。／無用な残虐は見よ、我々のみ旗が許さない。／草をも木の根をも岩かどをもいとほしむ我等。東方のみやびた國人が今、すめらあじあをつくるのだ。（中略）その建設の地ならしだ／迷惑だらうがほんの一時、／毒のあるのも猛々しいのも／一まづ逃げて居つてくれ、／今は急ぐのだ進撃だ疾風だ／南へ南へシンガポールへ／悪の密林のその大根を根絶やしに／進撃の一ヶ月。ただひた押しに／半島をたちわつて長駆五百キロ／南へ南へシンガポールへ。」と書いていた。

佐藤は、名指しすることは避けながらも、シンガポールを含めマレーを支配した英国人を、「海賊の子孫どもの商人」、「奴等」、「うそつきのから威張の卑怯ものども」、「紳士面のけちな無頼漢ども」と、表現していた。さらに、シンガポールに向け進軍する中で目撃する英国領マレーは、「不正の密林地帯」「悪の密林」、「足枷や手枷の重い鎖」、「街も文化も組織もみんな偽善」、「白く塗られた墓原」、「見かけ倒しのごまかし」と、邪悪と偽善が支配する地域であることを印象づけていた。

このように、敵となった英国及び英国人と、彼等のアジア支配を、煽情的文言により畳みかけ糾弾していた。しかも、このような詩を、日米戦争の緒戦の段階、すなわち「撃ちてし止まむ」の運動に先立つ一年近く前から書く佐藤は、同時代の中でも先鋭的な異色の詩人として位置付けることができるであろう。さらに、こうした煽情的な作品が、ラジオ放送という開かれた公共空間に流れることを前提に、あるいは放送されるがゆえに書かれ

ていたことは注目すべきであらう。

以上、日米開戦以降、戦意昂揚を囂る「愛国詩」として放送に乗った作品の中、敵愾心を掻き立てる煽情度の高いと見なされる作品を紹介した。日米開戦は、戦う敵が米英であることが明確になり、詩の動員を通じた戦意昂揚が囂られ、詩人もそれに応える作品を創作していたことを確認できた。

日米開戦後、ラジオの「愛国詩」のコーナーで朗読された詩には右に紹介したような煽情的作品を見出すことができたが、他方、そうした作品が全てを占めたわけではないことも、同時に指摘しておかねばならないであろう。また、敵愾心を助長する作品でも、敢えて敵米英を名指しすることを回避する傾向が垣間見えた。さらに、野口や佐藤の作品に見えるような、敵米英への憎悪を掻き立てるため、多くの字数を使い、戦う相手を殊更貶めるための文言を多用する作品は必ずしも多くはなかった。さらに「鬼畜米英」のように、米英を人種偏見に満ちた「鬼畜」と形容しながら、その打倒を煽情的に訴える作品も見出すことはできなかった。日米開戦後、大敵米英を相手にすることになったので、一方で戦意昂揚が目指され煽情度の高い詩が創作されたものの、他方において、一定の抑制はかけられていたとも言える。あるいは、日本の歴史や文化の中では、敵を明確化しながら戦闘を主題に据え、敵への憎悪を殊更掻き立てる作品を生み出す精神的土壌は希薄であったと言えるかもしれない。

日米開戦後、内務省の湯浅倉平次官は次のような談話を発表していた。すなわち、たとえ敵国内で日本人が不当な扱いを受けているとの報道に接しても、国内の敵国人に対し報復的な行動はしない国民的矜持が必要であることを訴えていた。また、たとえ敵性国の国民であったとしても、善良で平和的な人なら懇切と礼讓をもって接し、日常生活の中では、隣保友好であるべきとも談じていた。<sup>28)</sup> こうした統治者の方針もあり、日米開戦後、戦意昂揚が一方において囂られながらも、他方において、敵愾心を掻き立てるため、敵国及び敵国人を過度に蔑み、人種偏見を助長するような文言を詩歌に乗せて創作することは自制されていたと言えるかもしれない。しかし、次

章で紹介する「撃ちてし止まむ」の運動は、こうした侮蔑と人種偏見に満ちた文言を詩歌に活用する、あるいは多用することへの抵抗を解除していくことになる。詩歌に限らず、それを推奨する精神的空間が日本国内に開かれることになったと言えるであろう。<sup>(125)</sup>

#### 第四章 「撃ちてし止まむ」の始動と朝日新聞

冒頭で紹介したように「撃ちてし止まむ」の運動は、昭和一八（一九四三）年三月一日陸軍記念日を期して企画されたが、その記念日の当日の『朝日新聞』朝刊は、「決戦下の陸軍記念日を迎ふ」との見出しの下、歌人の植松寿樹と俳人の長谷川素逝の作品を掲載していた。以下、二作者の来歴とともに作品を紹介してみたい。植松は、日本文学報国会の短歌部会の参事（二六名）の一人であり、昭和一四年に歌集『枯山水』を、翌一五年には、随筆を所収した『稗畑』<sup>(126)</sup>を公刊している。『稗畑』は、非政治的な日常や自然を主に論じ、『枯山水』も、後述するように時局に関連した作品は掲載されるものの、総じて非戦時を題材にした作品が多く掲載されている。<sup>(127)</sup>

長谷川は、日本文学報国会の俳句部会の会員ではあったが、役職には就いていなかった。<sup>(128)</sup>既述のように日中戦争勃発直後、戦争句の傑作が出ることを期待していた山口誓子であったが、戦争俳句が実際に創作されるようになると、その殆どが駄作であると嘆くようになっていた。そうした中、長谷川だけはそれに成功していると評し、瞩目する作家として紹介している。<sup>(129)</sup>誓子は「支那事変三千句」の編纂に携わった際、「戦闘俳句」と「それ以外の戦時俳句」に大別していたが、各々代表する俳句を紹介する際、どちらの冒頭にも長谷川の作品を置いていた。<sup>(130)</sup>誓子の長谷川への評価は、その後も変わらず、戦争と俳句との関係を論じた際にも「今次支那事變に出征した作家長谷川素逝氏の句集『砲車』から」とし、<sup>(131)</sup>彼が戦地で詠んだ七句を紹介している。その中には万葉集の歌に

扱っているものもあると解説しながら「素逝氏もまた大君の醜の御盾として、皓々たる月下に、しかも直土ひたつちの上に横たはつたのであつた」、「上代防人の精神をその精神とし、戦場に露営の夢を結んだのであつた。」と好意的に紹介していた。<sup>(134)</sup> 同じく誓子が満州で小学校教員を対象とする講習会の依頼を受けた際、先方が希望する講演内容の中で、事変俳句についての感想を聴かせて欲しい、「長谷川素逝氏の作品は感銘深く読んでをります」と言われたことを記してもいた。<sup>(135)</sup>

富安風生も、前線が生んだ数限りない文学の中で、長谷川の『砲車』ほど優れたものはなく、戦争文学中上乘の一つであるが、散文学の『麥と兵隊』ほどに世間に謳われたいのは、俳句という文学が一般向きでないため、俳句集であるため損をしていると、嘆じていた。長谷川の句を紹介しながら、「調子は高朗で、雄渾の氣魄迫みちみちた、幾多の名吟となつて現れた。『砲車』を今日、衆目瞻仰する前線俳句の最高峰とすることに、何人も異存がない。」と絶賛していた。

これらの言及からも同時代の中で、長谷川は秀逸な事変句を詠み、俳壇の中の先陣と一般にも認知され評価されていくことがわかる。

「陸軍記念日」当日の朝刊に『朝日』が掲載した、植松寿樹の「捷ちし力漲らふ」、長谷川素逝の「三月十日」と題する作品は左の通りである。<sup>(137)</sup>

植松寿樹「捷ちし力漲らふ」

「今日はこれ三月十日常ゆけに代々木の空を拝したてまつる／奉天に捷ちし力満ちに満ち今日に及びていや漲らふ／奉天に捷ちし其の日たゆみなく今日の戦ひに備へし皇軍／米英を屠り果てずばとこしへに天日凍てて循りやむべし／米や英や鬼畜のやから跡絶えし／さやけき世界を裔の子等よ見よ」

長谷川素逝「三月十日」

「みいくさは海こえ海こえ地は草萌え／照れる日のをのこ業すと冴えかへる／身に余寒かたきのいのちあますなし／春光微塵われらも身もて創る歴史／國はいま四万の木の芽のきざす中」

右の二篇とも皇軍の勇姿と皇国悠久の歴史を詠んでいる。長谷川の句は、「撃ちてし止まむ」の運動の中、敵愾心昂揚のため常用された文言を見出すことはできず、身を引き締め、死を恐れることなく戦に向かう覚悟を迫る効果はあっても、該運動を象徴する作品として敵愾心昂揚を図る効果がどこまであったかは疑問であろう。<sup>(138)</sup>

植松の作品は長谷川のそれと異なり、「撃ちてし止まむ」の運動を体現していた。冒頭、半年後に学徒出陣の壮行会が開催されたことでも有名になる陸軍練兵場のあった「代々木」の空を想起させ、続いて「奉天」の地名で陸軍記念日が設定された日露戦争を重ね合わせる。日露戦争と大東亜戦争を連関させ、前者の延長線上に後者を位置付けている。因みに、前出の植松の歌集『枯山水』は、後半になるに従い、灯火管制、応召、出征とその見送り、戦地の兵士、慰問袋、帰還兵、負傷兵、大陸やノモンハン<sup>(139)</sup>ハルハ<sup>(140)</sup>での戦い、さらには天津租界封鎖事件をめくり高揚した反英気運を扱ったと考えられる日英紛争など、政治や戦時関連の作品が増加している。その中には、「銃剣を敵の背中まで貫きて引き抜きがたくなりけりとか」と、伝聞ながらも戦地の壮絶な戦闘を書き、駅頭に見送った教え子が戦病死したことについて「一人は一人を屠るべきなり戦いなり惜しや伊東病に斃る」と「屠る」の文言を使い無念の想いを表出させていたが、それは例外的であり他の作品には用いられていない。時代が下るに従い「戦時歌」を詠むようにはなるが、その先陣を切る歌人ではなく、「鬼畜」や「屠る」を常用する歌人ではなかったと言える。しかし、植松は、右作品の後段において、敵米英を打倒することを「米英を屠<sup>(141)</sup>



日米開戦後における詩歌の動員と競合

日本の歌壇が

日米開戦後、日本の歌壇は空前の動員と競合を遂げた。戦前の歌壇は、主に文壇の附随物として存在していたが、戦後は、国民の心を鼓舞し、戦意を鼓舞する重要な役割を担った。

戦前の歌壇は、主に文壇の附随物として存在していた。戦後は、国民の心を鼓舞し、戦意を鼓舞する重要な役割を担った。この変化は、戦時体制の確立と密接に関連している。



戦時体制下での詩歌の役割は、単なる娯楽を超えて、国民の士気を高めることにあった。多くの詩人が、戦場から直接の報告や、戦友への激励の詩を発表した。

戦時体制下での詩歌の役割は、単なる娯楽を超えて、国民の士気を高めることにあった。多くの詩人が、戦場から直接の報告や、戦友への激励の詩を発表した。

戦時体制下での詩歌の役割は、単なる娯楽を超えて、国民の士気を高めることにあった。多くの詩人が、戦場から直接の報告や、戦友への激励の詩を発表した。

戦時体制下での詩歌の役割は、単なる娯楽を超えて、国民の士気を高めることにあった。多くの詩人が、戦場から直接の報告や、戦友への激励の詩を発表した。

戦時体制下での詩歌の役割は、単なる娯楽を超えて、国民の士気を高めることにあった。多くの詩人が、戦場から直接の報告や、戦友への激励の詩を発表した。

戦時体制下での詩歌の役割は、単なる娯楽を超えて、国民の士気を高めることにあった。多くの詩人が、戦場から直接の報告や、戦友への激励の詩を発表した。

戦時体制下での詩歌の役割は、単なる娯楽を超えて、国民の士気を高めることにあった。多くの詩人が、戦場から直接の報告や、戦友への激励の詩を発表した。

戦時体制下での詩歌の役割は、単なる娯楽を超えて、国民の士気を高めることにあった。多くの詩人が、戦場から直接の報告や、戦友への激励の詩を発表した。

皇國自存自衛に起る 米日運糧を奪取せよ

皇國自存自衛に起る 米日運糧を奪取せよ。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。

皇國自存自衛に起る 米日運糧を奪取せよ。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。

皇國自存自衛に起る 米日運糧を奪取せよ。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。

皇國自存自衛に起る 米日運糧を奪取せよ。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。

皇國自存自衛に起る 米日運糧を奪取せよ。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。

皇國自存自衛に起る 米日運糧を奪取せよ。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。

宗廟國魂 皇國自存自衛に起る

宗廟國魂 皇國自存自衛に起る。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。

宗廟國魂 皇國自存自衛に起る。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。

宗廟國魂 皇國自存自衛に起る。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。

宗廟國魂 皇國自存自衛に起る。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。

宗廟國魂 皇國自存自衛に起る。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。

宗廟國魂 皇國自存自衛に起る。これは戦時体制下の重要なスローガンであり、国民に戦意を鼓舞する役割を果たした。



図 5



り」「米や英や鬼畜のやから跡絶えし」と、「撃ちてし止まむ」運動  
 渦中に常用されることになる「屠り」「鬼畜」「やから」と書き、粗  
 野で人種偏見を帯びた文言を活用し、時局の要請に応える作品を創  
 作し寄稿している。

ところで、「屠り」という文言は、「屠殺」の熟語があるように、  
 敵を人間以下の動物と見做す語感を持ち人種偏見を帯びた文言と解  
 することもできたが、日米開戦直後に喧伝された「屠れ！米・英、  
 我等の敵だ！（傍点筆者）」の標語の中にも象徴的に登場する。例  
 えば、該標語は、開戦直後の大政翼賛会の機関誌の一面下段を貫き  
 横書きで大書され紹介された(図1)。同じ号の二面の右方には縦  
 書きで「進め！一億 火の玉だ！」(図2)、三面左方には「この一  
 戦 何がなんでもやり抜くぞ」(図3)が紙面を貫き、四面は上段  
 横書きで「見たか戦果 知ったか底力」(図4)と、各標語が同じ  
 ように大書され読者を「戦い」へと煽動していた。もつとも、標語  
 の効果については疑念も出されていた。まず、これらの標語は、紙  
 も印刷も不足の中、悪筆で書かれたものがそのまま印刷されビラ  
 になって電車内、その他に貼り出されたため、心ある人の眉をひそ  
 めさせたのではないかとされた。ここに示す大政翼賛会機関誌に掲  
 載された標語の字体も、*ぞんざい*とも言える手書きで、かかる感想を

彷彿とさせる。さらに標語「屠れ米英、我等の敵だ」の文言も低調拙劣と難じ、戦線に立たぬ国民が米英を屠るには、日常生活の中から英米崇拜の遺物たる英語を駆逐したり、米英的エチケツトを駆逐したりする方が早道かも知れぬ。従って、もつと具体的に「愛せよ國語、使ふな英語」とでもやればピント来るだろうと主張する者さえいた。<sup>(14)</sup>

このように一部において標語の宣伝効果には疑問が投げかけられたものの、敵打倒を表現する文言として従前より用いられてきた、「屠れ」「屠る」は乱用され、ガダルカナル島撤退前後、敵撃滅を表現する際にも好んで使われることになる。室生は、戦局を伝える当時の新聞報道を「毎朝新聞の大きな活字がふえる、躍り上るくらい大きな活字だ、活字は燃えて火になる」と形容<sup>(15)</sup>していたが、読者を煽る大きな見出しの中で、頻繁に登場することになる。図5に示す「ソロモン、ラビ（ニューギニア）で海鷲廿九機を屠る」はその典型であるが、それ以外にも「在支敵空軍の蠢動を完封 八十四機を屠る 昨年九月以降 我航空部隊の戦果<sup>(16)</sup>」、「艦船百八十一隻を屠る 飛行機千三百十一撃破 総合戦果<sup>(18)</sup>」、「レンネル島沖・雷撃機の奮戦 忽ち屠る戦巡艦 敵護衛機、徒らに狼狽<sup>(19)</sup>」、「爪哇上陸作戦武勳 敵艦廿二隻を屠る<sup>(15)</sup>」と、同時期の見出しの中では敵打倒を「屠る」と表現することが常用化されていた。陸軍記念日当日の『朝日新聞』の朝刊に、「撃ちてしまむ」の運動を飾る「歌」として掲載された作品の中に、人種偏見を帯びた「鬼畜」とともに「屠る」の文言が登場しているのは、その一端と捉えることができる。戦況報道だけでなく詩歌の作品の中にまで、「鬼畜」「屠る」の文言が活用され、目立つようになるのは、該運動の特徴を象徴的に示していたと言えよう。

## 結語

日米開戦後一周年を期し大政翼賛会文化部が発起した「軍神につづけ」の企画は、日本文学報国会の、短歌、俳句、詩の各部会に加えて、『朝日』、『讀賣』、『毎日』の三大主要新聞の協賛を得て実現していた。競合関係にある主要三大紙が、題名に同じ標語「軍神につづけ」を掲げた連載を、「短歌（朝日）」、「俳句（讀賣）」、「詩（毎日）」と各々分担し、同日に開始していることは興味深い。新聞を始めとするメディア、さらには、短歌、俳句、詩の各分野が、短時に連携即応していたのである。このように統治者、文壇、メディアが協調する態勢は、後に続く「撃ちてし止まむ」の運動にも生かされていくことになる。

こうした詩歌の戦時動員は、日米開戦までは「詩」ではなく、歴史や伝統を有する「短歌」や「俳句」が先陣を切り、「短歌」と「俳句」との間では、字数（十七音）や季語の制限から戦時を詠うことにおいて「短歌」が「俳句」より優勢であった。「詩」は、後塵を拝する位置にいたが、日米開戦後は、「短歌」と立場を逆転させ一躍脚光を浴び、時代の寵児になっていく。そこには、時局に即応することをめぐる三者の競争意識を垣間見ることができるとともに、詩を時代の寵児にした背景にはラジオ放送があった。戦意昂揚を図る作品を創作するためには、字数を多く割くことができる詩が有利であったことに加え、ラジオ放送での朗読が追い風になったのである。日米開戦後、ラジオ番組に「愛国詩」コーナーが設けられ、多くの詩人が時局の求める詩を創作し、その作品がラジオを通じて流されたのは、その証左であった。ラジオ放送に短歌が登場することは稀であり、俳句の出版は殆どなかった。また、ラジオ放送は、新聞や雑誌のように「活字」ではなく、「音」を通じての伝達であるため、朗読するアナウンサーの口調に乗せる関係から、情緒に走る傾向が生まれていた。同じラジオ放送された作品の中でも、放送局より直接委嘱を受け創作された詩が、新聞や雑誌の依頼を受け一旦は活字化された詩より、

煽情度の高い傾向にあったことが、それを裏付けていた。

このようにラジオ放送では情緒過多の詩が好まれたものの、その一方で、放送された作品が敵愾心を殊更煽る作品ばかりではなかったことも同時に確認できた。そもそも本稿が考察対象とした『愛國詩集』所収の、ラジオ放送で朗読された作品の半数弱には、敵が登場していなかった。さらに、米英への名指しは避けられる傾向にあり、敵を殊更侮蔑し、あるいは人種偏見を帯びた文言を活用し、敵愾心を煽る作品は多くはなかった。それは、「軍神につづけ」の企画で寄せられた作品も同様であった。「鬼畜」や「屠る」の文言は、見出すことができなかった。そうした人種偏見を帯びた文言が常用されるようになるのが「撃ちてし止まむ」運動を契機としていたことは、昭和一八年三月一〇日の陸軍記念日当日の『朝日』紙面に掲載された短歌により象徴的に裏付けることができた。「撃ちてし止まむ」の運動を契機に、戦況報道だけでなく詩歌の作品上にまで、「鬼畜」や「屠る」の文言が抵抗なく活用されるようになったのである。

本稿では、「撃ちてし止まむ」運動が始動する際に、『朝日』に掲載された作品に注目し考察を加えた。「軍神につづけ」の連載企画を主要三大紙が短時に採用していたことに象徴されるように、詩歌の世界同様、新聞メディアの中でも時局に即応することにおける競争が発生していたことは想像に難くない。『讀賣』は、詩歌ではないが「撃ちてし止まむ」の題目を掲げた連載を組んでいた。<sup>(15)</sup> その一方で「撃ちてし止まむ」の標題を掲げ、詩歌を動員する大型の連載を組んだのは『毎日』であった。既述の通り「軍神につづけ」の企画の中で同紙は、「詩」の連載を担当するだけでなく、これに先立ち大東亜戦争一周年を記念して企画された『愛國百人一首』編纂も協賛していた。『毎日』は、戦時下における詩歌の動員に積極的に参与した新聞であり、主要三大新聞の中でも文壇との距離は最も近い関係にあったと言ってよいであろう。<sup>(16)</sup> そうした歴史を有する同紙は、「撃ちてし止まむ」の運動が始動する際も、他紙に比し大型の連載を組むことになる。昭和一八年二月二四日より陸軍記念

日の三日後の三月一三日まで、二十五名の詩歌人を登場させる十五回の連載を企画し実現させていたのは、その証左である。参考までに、二十五名の文人を掲載順に列挙すると、佐藤春夫、富安風生、山口誓子、水原秋櫻子、土屋文明、齋藤瀾、川路柳虹、北川象一、室生犀星、川上三太郎、前田雀郎、田邊幻樹、釋迢空、松村英一、三好達治、伊東静雄、安西冬衛、火野葦平、高濱虚子、高村光太郎、齋藤茂吉、山口青邨、青木月斗、井上康文、野口米次郎、の名前が並ぶ。日本文学報国会の「詩」、「短歌」、「俳句」を始めとする部会の役員を中心に、各分野の著名な文人が起用されている。かかる連載に寄稿された作品についての考察、各作者の戦時への向き合い方、対処の仕方についての比較検証は別稿において改めて行う予定である。

(1) 玉井清「日米戦争下の敵愾心昂揚についての一考察―ガダルカナル島撤退との関連で―」(『法学研究』、第九二卷第一号、平成三十一年一月)。

(2) 玉井清「撃ちてしまむ」の始動」(『法学研究』第九二卷第一二号、令和元年十二月)。

(3) 諸橋英一「第一次世界大戦と日本の総力戦政策」(慶應義塾大学出版会、二〇二一年)。

(4) 日本文学報国会は、日米開戦後に鳴り物入りで誕生し、種々の企画を主催、協賛することになるので、同時代の文壇の戦時動員を牽引する強力な組織と考えられがちであるが、発足当初の迷走ぶりを見ると、必ずしも文壇を強固に統制する組織ではなかったことは注視する必要がある(玉井清「日本文学報国会結成についての一考察―昭和戦時文壇の統合をめぐる迷走について―」、『法学研究』第九四卷第九号、令和三年九月)。

(5) 筆者は既に、日中戦争勃発後、文壇の統合と動員が図られる中、かかる時局の風圧を受け即応を余儀なくされる文人の苦悩と葛藤について考察を行っている(玉井清「昭和戦時文壇の苦悩についての一考察―《政治と文学》室生犀星の観察と葛藤を手掛かりにして」、『法学研究』第九三卷第一号、令和二年二月)。本稿は、その統編として日米開戦後の時期を中心に考察を加える。

(6) 同右。

- (7) 日米開戦後、真珠湾攻撃の二月八日に開戦の詔勅が出されたことを記念して、毎月八日は、大詔奉戴日となる。
- (8) 大政翼賛會文化部編『軍神につづけ』（編輯 大政翼賛會文化部、発行 大政翼賛會宣伝部、発売 翼賛図書刊行会、配給 日本出版配給株式会社、昭和十八年二月十日、定価金二〇銭、五萬部）。
- (9) 高橋「はしがき」（前掲『軍神につづけ』一一二頁）。
- (10) 連載のスタートは三紙とも一月二七日と統一されていたが、回数と「終」の期日は、『朝日』が七回で二月一日、『讀賣報知』が一七回で二月二五日、『毎日』が一四回で二月一六日と統一されていないので、その点は各社にまかされていたと考えることができる。
- (11) いずれの部門も、冊子掲載に際しては、紙面掲載日ではなく、あいうえお順で掲載している。
- (12) 短歌を分担した『朝日』は、「軍神につづけ、大政翼賛會文化部推薦」と題し、昭和一七年一月二七日の佐佐木信綱、同二八日の土屋文明、二月一日の齋藤茂吉、同二日の吉植庄亮と齋藤瀧、同四日の川田順と窪田空穂、同一〇日の太田水穂と逗子八郎、同一一日の松村英一と半田良平、と朝刊に七回にわたり連載した。一〜三回まで佐佐木、土屋、齋藤が単独で、四〜七回は二名連名で掲載している。短歌部門での力関係を示して興味深い。また、窪田の作品には、初出の新聞掲載に際しては無題であったが、冊子所収に際しては、他と揃えるため連載の表題「軍神につづけ」が付けられていた。因みに、一〇日の逗子八郎は、情報局第五部第三課で、文壇を内面指導すべく奔走した井上司朗の号である。井上については、前掲・玉井「日本文学報国会結成についての一考察」の中でも論及している。
- (13) 俳句を分担した『讀賣』も、「軍神につづけ、大政翼賛會文化部推薦」と題し、一月二七日に高濱虚子を登場させ連載を開始するが、連載の趣旨について冊子の「はしがき」同様、次のように説明していた。「翼賛會文化部では大東亞戦争一周年を迎へるに当つて一段と國民の士氣昂揚を図るため日本文學報國會に委嘱して『軍神につづけ』の標語を得たが、更に目下全国的に展開中の勤皇烈士護國先覚者顕彰運動に呼应して俳人、歌人、詩人の協力を求め前記標語の精神を盛つた俳句、短歌、詩を得たので本紙もこれに協賛、そのうち俳句を連載する」としていた。高濱に続き、一月二八日の荻原井泉水、二月一日の水原秋櫻子、同二日の山口青邨、同三日の富安風生、同四日の長谷川かな女、同七日の佐藤肋骨、同九日の飯田蛇笏、同一一日の青木月斗、同一二日の伊藤松宇、同一四日の伊東月

草、小野燕子、同一五日の山口誓子、同一六日の中塚一碧樓、同一七日の白田亞浪、同一八日の渡邊水邑、同一九日の室積徂春、同一五日の大谷句佛、松根東洋城と、一七回にわたり連載した。短歌同様、無題か複数の句を貫く詞書がない場合（佐藤肋骨は「真珠湾攻撃」との共通題であったが「軍神につづけ」との題が付けられている）は、「軍神につづけ」が付けられていた。

(14) 詩を分担した『毎日』は、「軍神につづけ、大政翼賛會文化部推薦」と題し、一月二七日に高村光太郎を登場させ連載を開始するが、冒頭で連載の趣旨を、次のように説明していた。「大東亞戦争一周年に当たり、本社は全国に展開される國民士氣昂揚運動に協力して、わが國一流詩人を動員、こゝに『軍神につづけ』の題下に翼賛會文化部推薦にかゝる愛國熱情詩十数篇を連載し以て米英撃滅の目標に邁進することとなつた」とする。高村に続き、一月二八日に野口米次郎、同二九日に室生犀星、二月一日に藏原伸二郎、同二日に井上康文、同三日に與田準一、同四日に川路柳虹、同六日に西條八十、同九日に前田鐵之助、同一〇日に尾崎喜八、同一日に丸山薫、同一二日に笹澤美明、同一五日に佐藤一英、同一六日に三好達治と一四回の連載を行なっている。連載には掲載されなかったが、二月八日の紙面に、南方戦線より帰り来て大詔渙発一周年記念日にとの注釈が付され掲載された大木惇夫の詩、それ以外にも締め切りに間に合わなかったためか連載未掲載の安西冬衛、伊東静雄、小野十三郎、竹中郡の詩も同冊子には所収されている。したがって、新聞掲載は一四詩人一四篇であったが、冊子所収は、一九詩人の一九篇が所収された。連載の冒頭、掲載予定十数篇としていることから、掲載者に関しては当初確定していなかったことがわかる。企画の立ち上げから連載開始までに時間的余裕がなかったため編集には混乱があったことが想像される。

(15) 「愛國百人一首」の編纂企画については、前掲・玉井「日本文学報国会結成についての一考察」参照のこと。

(16) 「九軍神」は、大がかりな日比谷公園での葬儀が行われ、新聞各紙が一面トップで大きな見出しを打ち、多くの紙面を割いて煽情的に報道した。日本文学報国会は、戦時下強く美しく生き抜く「日本の母」の顕彰運動を推進したが（前掲・玉井「日本文学報国会結成についての一考察」）、明治の軍神の広瀬や乃木が壮年で父性イメージであるのに比し、未婚の若い兵士が軍神となっているので、彼等「軍神」を育てた「母」に焦点が当てられることになる（山室健徳『軍神』〈中公新書、二〇〇七年、二六一―三〇〇頁〉）。

(17) 前掲・玉井『撃ちてし止まむ』の始動。

- (18) 佐佐木信綱「厳し世」(前掲『軍神につづけ』四頁)。
- (19) 大木惇夫「孤忠の賦」(前掲『軍神につづけ』三五頁)。
- (20) 齋藤瀧「あとがき」(齋藤「わが悲懐」、那珂書店、昭和一七年二月、三二八頁)。なお、齋藤については、前掲・玉井「撃ちてしまむ」の始動、同「日本文学報国会結成に関する一考察」の中でも言及している。
- (21) 斎藤茂吉「短歌拾遺」(『斎藤茂吉全集・第四卷』、岩波書店、昭和五十年、一〇六、一四二頁)。
- (22) 歌手・藤井典明、四家文字、作詩・梅木三郎、作曲・高木東六、ビクターレコード(A四三二一A)より発売(『昭和流行歌総覧―戦前・戦中編』(柘植書房新社、二〇〇七年)、映画化(渡邊義美監督、昭和一七年九月公開)もされ、主題歌となりヒットする)。
- (23) 「み軍に従いたてまつらん」は、日米開戦後から「撃ちてしまむ」運動が始動するまでの間の、昭和一七年七月三、六日、八月一八日、九月一、一四、二九日、一〇月五、一六、二五日、十一月六、一二、二九日、十二月五日、一八年一月一日と、半月に一回の割合で少なくとも一回にわたり繰り返しラジオ放送の中で朗読されたことが確認できる(坪井秀人「声の祝祭―日本近代詩と戦争」(名古屋大学出版会、一九九七年)所収の「付録・朗読詩放送の記録」を参照。本稿で、愛国詩のラジオ放送された日付については、同記録を参照する)。なお、昭和一七年末以降になると、「断じて許すべからず」が蔵原の代表作品として登場し、「み軍に従いたてまつらん」に代わって、繰り返し放送されることになる(昭和一七年二月二八日、一八年三月二日、一日、四月一日、六月一七日、七月六日)。
- ラジオで朗読された愛国詩については第四章で改めて論及するが、「撃ちてしまむ」の文言は、蔵原の「み軍に従いたてまつらん」だけでなく、蔵原「神の軍勢」(後掲『愛國詩集』一九三―一九五頁、昭和一六年一月二三日放送)にも、あるいは佐藤一英「雪降り」(後掲『愛國詩集』二二―二七頁、昭和一六年一月二六日放送)にも登場する。
- (24) 前掲・佐佐木信綱「厳し世」。
- (25) 逗子八郎「戦果の蔭に」(前掲『軍神につづけ』四頁)。
- (26) 松村英一「祖先の血」(前掲『軍神につづけ』六頁)。



- (27) 安西冬衛「軍神につづけ」(前掲『軍神につづけ』二〇―二二頁)。  
 (28) 井上康文「部署を護る」(前掲『軍神につづけ』二六―二八頁)。  
 (29) 尾崎喜八「軍神につづけ」(前掲『軍神につづけ』二九―三一頁)。  
 (30) 前掲・大木惇夫「孤忠の賦」。  
 (31) 注(14)参照。  
 (32) 野口米次郎「空の牧野中佐」(前掲『軍神につづけ』五六―五八頁)。  
 (33) 西條八十「爆撃機を我が家とせん」(前掲『軍神につづけ』四四頁)。  
 (34) 前掲・玉井「昭和戦時文壇の苦悩についての一考察」。  
 (35) 室生「文學は文學の戦場に」(『新潮』昭和二三年七月、室生「一日も此君なかるべからず」(人文書院、昭和五年九月、一七一―一七五頁)に所収)。そうした中、榊山潤の一、二の作品には、「ほとぼしり」を見ることができると一定の評価をしていた(同上)。  
 (36) 三好達治「言葉、言葉、言葉」(三好『風蕭々』、昭和一六年四月、河出書房、三五頁)。  
 (37) 同右。  
 (38) 三好達治「事変に關する詩歌」(前掲・三好『風蕭々』三〇〇―三〇一頁)。  
 (39) 三好は、この詩を四月一〇日夕刊の『大阪朝日』で読んだ(三好達治「ニュースの詩的感興」(『文學界』昭和二年六月号)と記しているが、版の關係であろうデジタル版だと見出すことができず、四月一〇日朝刊の『東京朝日』七面に、「熱血詩人白秋、感激の巨篇、深使本社に派す」の見出し付きで掲載されている。同日の『東京朝日』の朝刊は二〇面の特別体制で、「神風の覇業遂に成る」との大きな見出しを打ち、広告を含め殆どの紙面において偉業達成を祝する記事を掲載していた。『大阪朝日』は、『東京朝日』より早い九日夕刊(一〇日付夕刊)で大きく取り上げ号外も発行、朝刊も「神風」に輝く新記録」との大きな見出しを打ち関連の報道に紙面を割いているが、前日の夕刊で多く報道済みのためか、一〇日朝刊だけを比較すると、『東京朝日』の方が紙面を多く割いていた。
- (40) 前掲・三好「ニュースの詩的感興」。このように北原白秋の詩を論難した三好であるが、白秋の書く詩の全てを批判していたわけではない。例えば、出色の白秋の詩が、歌曲を付けられたことにより駄作に貶められたことを次の

ように嘆いてもいた。「國民歌謡『落葉松』、白秋の詩出色だけど歌謡になり、魅力なくなり愚にもつかないものになった。西洋音楽的手法流儀の歌曲化、發聲方、原詩の詩趣勘どころを殆ど無視、勝手放題、内容を伴はない空虚な表情ばかりが耳について困る、西洋臭いものであるか否か、それらにほとんど無頓着、木に竹を繼いで『國民歌謡』もちとおかしな話」(三好達治「木に竹を繼ぐ」、前掲・三好『風蕭々』三〇六―三〇七頁)と、國民歌謡を諷いながら西洋音楽手法を採用している矛盾を衝くとともに、傑作の詩も付される曲次第で原作の価値を貶めることを指摘していた。これは、三好の軍歌に対する視座にも共通し、東京日日応募の「進軍歌」で、一席をとった本多信壽の作品を評価しながら、選者の一人菊池寛が選外になった「露宮歌」の方が情緒あると推していたことに対し一寸見当はずれ意見と一蹴していた(三好達治「軍歌雜記」、前掲・三好『風蕭々』六〇―六一頁)。周知の通り、レコードが発売されると、一席のA面「進軍の歌」ではなく、B面の「露宮の歌」の方が大衆に流布することになるので、日本の大衆の琴線に触れる評価については菊池の方が妥当であった。他方三好は、明治期に制作され流布した「敵は幾萬ありとても」も詩としては特別まずい方の作品だが、案外人口に膾炙しているのは、別に曲に魅力があるためだろうかとも、分析していた(同上、六二頁)。詩が活字ではなく、曲が付いて歌われたり、朗読されたり、音に乗せて伝えられる場合には、異なる印象を与えることが指摘されている。作者が、そうした差異を意識して創作すると、結果として情緒過多の作品が生まれる可能性が高くなったであろうことが推断できる。

(41) 前掲・三好「ニュースの詩的感興」。この表題自体、時局が詩歌に求めることを象徴的に表現していた。

(42) 室生については、前掲・玉井「昭和戦時文壇の苦悩についての一考察」も参照のこと。

(43) 前掲・室生「文学は文学の戦場に」。

(44) 室生犀星「詩歌小説」(『新潮』昭和一七年二月号、室生『筑紫日記』(発行 小学館、配給 日本出版配給株式会社、昭和一七年六月、三〇三―三一二頁)に所収)。

(45) 三好達治「事變に關する詩歌」(前掲・三好『風蕭々』三〇〇―三〇一頁)。

(46) 同右・三好「事變に關する詩歌」。

(47) 富安「新文化と俳句」(富安『草木愛』、龍星閣、昭和一六年二月、四一―四二頁)。

(48) 同右。

- (49) 富安「この頃の俳句について」(富安『霜晴』、龍星閣、昭和一九年三月) 一一三頁。
- (50) 富安「俳人も戦線へ」(前掲・富安『草木愛』一五〇―一五一頁)。
- (51) 同右。
- (52) 前掲・玉井「日本文学報国会結成に関する一考察」。
- (53) 前掲・富安「この頃の俳句について」一一二頁。
- (54) 時局に即応できないことから生じる俳壇のかかる焦燥は、『ホトトギス』(佐藤漾人、昭和一七年三月号)や『層雲』(筒井勁吉、昭和一七年八月号)誌上においても語られていた(櫻本富雄『日本文学報国会』、青木書店、一九九五、三五二―三五三頁)。
- (55) 前掲「付録・朗読詩放送の記録」の中で、歌人の名前を確認できるのは、「愛國和歌」の佐佐木信綱(昭和一六年一月二二日)、「伴の隼雄」の釋迢空(昭和一六年二月二八日)など例外的であった。日本放送協会編『ラジオ年鑑、昭和十八年版』(日本放送出版協会、昭和一八年一月)によれば、日米開戦後、この感銘を将来に残すべく、新作和歌を齋藤茂吉、佐佐木信綱、北原白秋、吉植庄亮、土屋文明、釋迢空、尾上柴舟に又漢詩を徳富蘇峰、鹽谷井柳堂等の諸氏に夫々依頼し、當代一流の吟詠者によって放送した(同上、五九頁)と記されている。前掲「付録・朗読詩放送の記録」によれば、右以外には、一月二二日に「愛國和歌」のコーナーが、歌人名なしで記録されているので、恐らく放送協会依頼の新作和歌は、こうしたコーナーで朗読されたと推定されるが、ラジオ放送の中で「短歌」自体、登場の機会は多くはなく、俳句はさらに逆境に置かれることになる。
- (56) 前掲・富安「この頃の俳句について」。
- (57) 富安「戦争・農村・俳句」(前掲・富安『霜晴』五七―五九頁)。
- (58) 山口誓子「戦争と俳句」(山口『俳句諸論』、河出書房、昭和一三年一月、二四五頁)。山口は、戦争俳句を詠む際の季語様式の影響についても、次のように解説していた。すなわち、戦争を詠むことにおいて自然諷詠を主対象に季語を大切にすることで伝統的俳句は困難を伴うのに比し、新興有季俳句は、外界の季節によって刺激された作家の生活感情を詠うので優位であるとしていた。他方、新興無季俳句は、「季節とか季節趣味とかの縛がないのであるから、十七音を存分に駆使し、天馬空を征くが如く颯爽たるもの」があるはずだが、国民感情と詩感との平衡をとることが

- 問題になり（山口誓子「戦争と俳句」〈前掲・山口『俳句諸論』二三五―二四六頁〉）、「俳句のかたがちが多分に紊れる危惧があり、よほど慎重に事に当らないと、徒に俳壇に雑草をはびこらせることに終つてしまふと思ひます。」（山口「戦争詩歌を語る、昭和十二年二月五日JOBK『戦争詩歌を語る』対談放送」〈前掲・山口『俳句諸論』二六一―二六二頁〉）と戒めていたが、それは、俳壇の中での誓子自身の立ち位置をも示していた。
- (59) 前掲・玉井「昭和戦時文壇の苦悩についての一考察」。
- (60) 山口誓子「戦争俳句」〈前掲・山口『俳句諸論』二七五―二七六頁〉。前掲・樽見「戦争俳句と俳人たち」の「山口誓子」の項（二二―二三頁）。
- (61) 山口誓子「戦争俳句集を讀む」（山口『夜月集』、第一書房、昭和十四年三月、三一―頁）。
- (62) 山口誓子『海の家』（発兌 第一書房、配給 日本出版配給株式会社、昭和十七年四月、二二三頁）。
- (63) 前掲・玉井「撃ちてし止まむの始動」。
- (64) 前掲・玉井「撃ちてし止まむの始動」。
- (65) 前掲・玉井「日本文学報国会結成についての一考察」。
- (66) 齋藤瀧「必勝力発揮と短歌」（『日本学芸新聞』昭和十七年一月一日）。
- (67) 齋藤「眞の短歌人」（前掲・齋藤「わが悲懷」二五二―二五三頁）。
- (68) 前掲・玉井「昭和戦時文壇の苦悩についての一考察」。室生も、日米開戦後、詩が脚光を浴びるようになったこととラジオ放送との関連に言及していた（同上）。
- (69) 一九二五（大正一四）年に放送を開始したラジオは、その聴取加入者数において、昭和七年二月に一〇〇万人を、昭和一〇年四月に二〇〇万人を、昭和十二年五月に三〇〇万人を、昭和十四年一月に四〇〇万人を、昭和十五年五月に五〇〇万人を、昭和十六年八月に六〇〇万人を、各々突破し、昭和十七年になると、聴取者は七〇〇万人近くに達していた（前掲『ラジオ年鑑、昭和十八年版』二頁）。世帯別でみると（昭和十七年三月末）、東京は約八割余、地方は三割から四割、全国平均で五割弱の世帯にラジオが普及していた（前掲『ラジオ年鑑、昭和十八年版』二一九―二二〇、二二六―二二八頁）。
- (70) 『軍艦マーチ』を高らかに 朝のラジオ・士気を鼓舞」（『東京日日新聞』昭和十六年二月九日付夕刊）。開戦

当初の番組編成では、国民の士気を急速に昂揚鼓舞するため、意識的に勇壮なる行進曲、軍歌、合唱の音楽が放送されていた（前掲『ラジオ年鑑、昭和十八年版』一八頁）。

(71) 前掲『ラジオ年鑑、昭和十八年版』二三頁。

(72) 前掲『ラジオ年鑑、昭和十八年版』二二―二四頁。なお、第一章で言及したように、真珠湾攻撃に際しては、特別攻撃隊に参加し殉死した若者を「軍神」として祭り上げることになるが、大本営がハワイ真珠湾で華と散った彼等を報じたのは、三月六日の午後五時であった。これを伝える五時と七時のラジオのニュースに際し、「海ゆかば」を奏楽、黙禱を捧げて敬虔な放送を行ったが、これも新しい放送形態といえようと記している（同上、三〇頁）。戦勝報道に際しては、「敵は幾萬」か「軍艦マーチ」、散華や玉碎に関する報道に際しては、「海ゆかば」を流す放送形態が確立していくことになる。

(73) 周知の如く、「兵に告ぐ」は、二・二六事件に際して、蹶起した部隊、特に下士官に向け投降を要請するラジオ放送であるが、その放送をした有名アナウンサーの再登板が注目されていたことがわかる。

(74) 「AKの活躍」、『東京日日新聞』昭和一六年二月九日付夕刊。

(75) 前掲『ラジオ年鑑、昭和十八年版』三頁。

(76) 新聞のラジオ欄では、日米開戦に伴い、都市番組を廃止し娯楽物も削減する「戦時番組」への編成替えが行われたことを、次のように紹介していた。すなわち「日本放送協会では、九日より放送番組も戦時番組に改め、従来の『朝の言葉』を『國民の誓ひ』、午後十時の『今日のニュース』の時間を『今日の戦況とニュース』と名稱を變へ、『軍事發表の時間』を特設、都市放送は中止、全國放送一本建て、臨時ニュースの時間を一日ほぼ十七回に増加、娯楽物は零時五分から音楽、夜八時の軍事發表に引續く『演藝と音楽』の二つになつた。」（『ラジオ・九日、戦時番組』『大阪毎日新聞』昭和一六年二月九日）。

(77) 関正雄（日本放送協会業務局長）「序」（『愛國詩集』、日本放送出版協会、昭和一七年九月）。

(78) 夜間終了時刻は、夜一〇時前後を一一時半頃まで繰り下げることになる（前掲『ラジオ年鑑、昭和十八年版』一五頁）。

(79) 前掲『ラジオ年鑑、昭和十八年版』五一―六頁。

(80) 「放送事項別放送実施細目表（昭和一七年六月一日現在）」によれば、五時半放送開始で、六時半から七時まで、「話」の時間が設定され、「日月金土（レコード音楽）、單講（約十五分間「國民の誓い」其の他）、火水木單講（二十分間）、残余時間は愛國詩朗吟等（大體録音）」と必要の場合は全中脱を認む」と記されていた。番組制作者として「愛國詩」の朗読は、「國民の誓い」の残余の時間を使って適宜入れ込むコーナーとして位置づけられていたようである。なお、放送開始時刻は、夏季は五時半から、一〇月より六時、十一月より六時半と季節により変更されていた（前掲『ラジオ年鑑、昭和十八年版』一九頁）。

(81) 「ラジオ・今日の放送」（『讀賣新聞』昭和一六年二月二二日）。新聞のラジオ番組欄では、「國民の誓ひ」の講演者は紹介されることが多いが、愛國詩の欄は、複数の詩人が登場するためかコーナー自体記載されぬことも多く、記載されてもアナウンサーの名前だけを紹介する場合が多かった。『讀賣』のラジオ番組欄で朗読される詩人と題名の詳細まで紹介されたのは珍しいが、初回であることに加え、本文にて指摘するように自紙掲載の作品のためであったと考えられる。

なお、坪井が発掘した資料「番組確定表」（NHK放送センター・データ情報部所蔵）に基づき作成された、前出の「付録・朗読詩放送の記録」によれば、日米開戦後の愛國詩朗読は、二月一四日に、「詩の朗読、（タイトル）愛國詩、（作品作者）不明、（朗読者）中村伸郎他」と記されているが、愛國詩の朗読は二日から開始されていたと考えてよいであろう。同記録によれば、資料の一四日の記載には鉛筆で×がついているので実際に放送されなかった可能性があると注記されているが、少なくとも同日の新聞のラジオ番組欄では、同じ内容が告知されている（『ラジオ・今日の放送』『讀賣新聞』昭和一六年二月一四日）。

(82) 高村の詩は、二月九日、野口の詩は二月一〇日、長田の詩は二月一日の『讀賣新聞』紙上に各々掲載されているが、野口の作品は、新聞紙上では「語を同胞に寄す」と題して掲載された。同詩は、その題目のまま、野口米次郎『宣戦布告』（道統社、昭和一七年三月）に所収されるが、その後注には、宣戦布告の数日前に執筆したことが記されている（同上、一六一―一八頁）。また、高村の「危急の日に」も、高村光太郎『詩集 大いなる日に』（道統社、昭和一七年四月）に所収されるが、その後注には、「昭和十六年十二月四日」と記されていた。これらのことから、開戦直後に『讀賣』が、他紙に先んじて開戦に合致する三詩人の作品を手早く掲載できたのは、宣戦布告前

に依頼していた作品が含まれていたためと考えることができる。

(83) 前掲『ラジオ年鑑、昭和十八年版』五三頁。

(84) 前掲『ラジオ年鑑、昭和十八年版』一三六頁。

(85) 前掲・関「序」(前掲『愛國詩集』)。

(86) 日本放送協会の「番組確定表」から作成された、前掲「付録・朗読詩放送の記録」に依る。但し、本表は、「……他」との記載があるため放送された作品全てが記載されていないことに加え、昭和一七年四月から六月までのデータは欠け、それ以外の期間でも「不明」の日があるため情報の欠落が多い。したがって、そうした資料的制約の中で繰り返し放送されたことを確認できる作品の中での特徴であることは留保しておきたい。以下の各詩の放送日についても、前掲「付録・朗読詩放送の記録」に依拠している。

(87) 河井醉名「眞住吉の神」(前掲『愛國詩集』九八―九九頁)。昭和一七年七月三、二七日、九月一、二、二七日、一〇月一、二、一六日、二八日、十一月九、一八日に放送された。日米開戦直後には、河井「大東亜戦争」が昭和一六年一二月二九日に放送され、一二月以降は、「眞住吉の神」に代わり「櫻」が朗読されることになる(一二月一四日、昭和一八年一月六日、二月二日、二月二七日、六月二七日)。「撃ちてし止まむ」の運動以降には、山本五十六国葬に関連して「航路」(昭和一八年五月二七日)が朗読されたが、河井の作品が登場することは少なくなる。

(88) 長田恒雄「聲」(前掲『愛國詩集』一二八―一三三頁)。昭和一七年七月二七日、八月一六日、九月二七日、一〇月一日、一九日、二八日、十一月五日、昭和一八年二月一〇日、昭和一九年二月二四日に放送された。

(89) 高村光太郎の「最低にして最高の道」(前掲『愛國詩集』二一〇―二二一頁)。昭和一七年四月一九日、七月六日、一五日、八月一三日、九月二日、二九日、一〇月一〇日、十一月六日、一二日、二九日、昭和一八年一月一日、一二月一八日に放送された。

(90) 山本和夫「その母」(前掲『愛國詩集』二二二―二二四頁)。日米開戦前の昭和一六年八月四日に、開戦後の一七年七月三日、一五日、八月一八日、二三日、九月二日、一〇月一〇日、二五日、十一月六日、十一月二九日、十二月二九日、昭和一八年一月一日に放送された。

(91) 尾崎喜八「此の糧」(前掲『愛國詩集』二五四―二五九頁)。昭和一七年三月二八日、九月二七日、一〇月一九日、

- 二二日、三〇日、一月五日、一八日、二四日、昭和一八年七月一日、一二月一八日に放送された。
- (92) 蔵原「み軍に従ひ奉らん」(前掲『愛國詩集』一三三―一三六頁)。放送日は注(23)参照のこと。
- (93) 前掲・玉井「日本文学報国会結成についての一考察」。
- (94) 土井晚翠「正義の鋒先」(前掲『愛國詩集』一六六―一六八頁)、昭和一六年一二月一五日に放送された。なお、この作品は、『東京日日新聞』(昭和一六年一二月二日)紙上に掲載されていた。
- (95) 村野四郎「擧りたて神の裔」(前掲『愛國詩集』一七二―一七四頁)、昭和一七年一二月一九日に放送された。
- (96) 丸山薫「南洋を望んで」(前掲『愛國詩集』二二七―二二九頁)、昭和一七年八月四日に放送された。
- (97) 相馬御風「神國顕現」(前掲『愛國詩集』一九六―一九八頁)、昭和一六年一二月二九日、昭和一九年四月二六日に放送された。
- (98) 西條八十「眞珠灣の軍神」(前掲『愛國詩集』一八七―一八九頁)。昭和一七年九月二二日の放送に「神鷲帰らず」と題する西條の詩が朗読された。題名は異なるものの同じ内容の可能性高く、少なくとも同じ題材を扱った作品といえる。
- (99) 三好達治「九つの眞珠のみ名」(前掲『愛國詩集』一八三カ―一八八)―一八六頁)、昭和一七年三月九日に放送された。
- (100) 中西悟堂「初雪の日」(前掲『愛國詩集』一九〇―一九二頁)、昭和一六年一二月二三日放送に放送された。
- (101) 長田恒雄「感激の賦」(前掲『愛國詩集』一六九―一七一頁)。
- (102) 岩佐東一郎「新しき天使」(前掲『愛國詩集』二六五―二六八頁)。
- (103) 白鳥省吾「大詔渙發の日」(前掲『愛國詩集』一六一―二〇頁)、昭和一七年一二月五日に放送された。
- (104) 堀口大學「呼びかける」(前掲『愛國詩集』六一―六四頁)、昭和一六年一二月二七日に放送された。
- (105) 勝承夫「我が子に教ふ」(前掲『愛國詩集』六五―六八頁)、昭和一六年一二月二八日、三〇日に放送された。
- (106) 野口米次郎「彈丸」(前掲『愛國詩集』七八―八〇頁)、昭和一七年二月三日、三月五日、昭和一八年六月二三日に放送された。
- (107) 西村峻三「神の御裔の國の歌」(『愛國詩集』一三四―一三八頁)、昭和一七年二月二二日、一〇月一六日、一一



- 月一六日、一二月一九日、昭和一八年一月二九日に放送された。
- (108) 前田鐵之助「十二月八日」(前掲『愛國詩集』八五―八九頁)。
- (109) 三好達治「アメリカ太平洋艦隊は全滅せり」(前掲『愛國詩集』三八―四〇頁)、昭和一六年二月二五日に放送された。「付録・朗読詩放送の記録」によれば、同一二月三日の欄に「米太平洋艦隊全滅」の文字が見えるが、この詩が朗読されたと推断される。
- (110) 深尾須磨子「天馬を驅りて征く」(前掲『愛國詩集』四七―五五頁、昭和一六年二月二六日、三〇日)。
- (111) 千家元磨も「あだに誇りし英米の／(中略)／東亞をみだす英米の／暴慢非望の謀略も／今は空しく仇の夢」と、米英を名指しで批判する作品を掲載していた(千家「戦捷に感激して」(前掲『愛國詩集』五六―五七頁))。
- (112) 第二部の冒頭には、大政翼賛会作の「大詔奉戴」が置かれていたが、詩人の冒頭は高村光太郎であった。
- (113) 前掲・玉井「昭和戦時文壇の苦惱についての一考察」。
- (114) 高村光太郎「彼等を撃つ」(前掲『愛國詩集』三一―三五頁)、昭和一六年二月一八日、二〇日に放送された。
- (115) 角田竹夫「空を―そして海を見よ」(前掲『愛國詩集』三〇頁)。
- (116) 尾崎喜八「決意はすでに堅い」(前掲『愛國詩集』三一―三三頁)。昭和一六年二月二〇日に放送された。「付録・朗読詩放送の記録」によれば、同一二月三日の欄に「決意」の文字が見えるが、この詩が朗読されたと推断される。
- (117) 神保光太郎「亞細亞に捧ぐ」(前掲『愛國詩集』九〇―九七頁、昭和一六年二月一六日に放送された)。
- (118) 西條八十「香港の日章旗」(前掲『愛國詩集』四五―四六頁、昭和一六年二月二六日放送された)。
- (119) 野口「マニラ陥落」(前掲『愛國詩集』一〇四―一〇六頁)。
- (120) 前掲『ラジオ年鑑・昭和十八年版』一八頁。ジャバ島完全戦定竝にランゲーン陥落に因るとして第二次戦捷祝賀日(三月十二日)が設けられた(同上)。
- (121) 高村光太郎「シンガポール陥落」(前掲『愛國詩集』一二〇―一二三頁)。昭和一七年二月一六日に放送された。
- (122) 野口「シンガポール陥落」(前掲『愛國詩集』一二四―一二七頁)。昭和一七年二月一六日に放送された。
- (123) 佐藤春夫「光の嵐(大東亜戦史のうち『マレー戦線進撃譜』)」(前掲『愛國詩集』、一一二―一一六頁)。「付表・

朗読詩放送の記録」に、シンガポールへの進撃や同地陥落をめぐり佐藤の作品が放送されたことの記述を見出すことはできない。他方、陥落前を詠っているので、二月八日「大詔奉戴（大政翼賛会撰）他」、一二日「朝明け 他」、一三日「彈丸（野口米次郎）他三」とある中で朗読された可能性がある。

(124) 「善良な敵國人はいたはれ！」（『大阪毎日新聞』昭和十六年二月九日）。

(125) 前掲・玉井「日米戦争下の敵愾心昂揚についての一考察」。

(126) 『昭和十八年の名簿』（社団法人日本文学報国会『会員名簿 昭和一八年度（昭和十八年三月十日現在）』、以下『昭和十八年の名簿』と略す）。

(127) 『枯山水』（砂子屋書房、昭和一四年一〇月）は、大正一五年八月以後昭和一四年七月までの作品を自選した、植松の第三歌集である。

(128) 『稗畑』（砂子屋書房、昭和一五年一月）は、植松が、大正年代から昭和一四年八月までに書いた随筆を所収している。

(129) 植松が随筆集の題名を「稗畑」としたのは、米不足で稗耕作の推奨が叫ばれていたことを揶揄する意図があったためである。昭和一四年は朝鮮半島の大旱魃の影響で国内の米不足が社会問題化していた時期であるが（小田義幸「食糧増産せよ、供出せよ」〈前掲・玉井『写真週報とその時代・上』参照のこと〉、そのような状況を受け「近年、荒蕪地利用が頻りに叫ばれ、其の候補作物として、稗が挙げられてゐること、人の知るところである。肥料を多く要せず、農業上の技術をあまり必要としない此の穀物は、素人の耕作に最も適してゐるからであらう。しかし、米が如何に不足を告げても、稗が吾々の常食に及び上るまでには、順位の高い食料品が多々控へてゐる。それを庭の隅まで耕地に直して稗を作れといふのは、人間の用は兎に角として、馬の嗜好に合つた糧食なるが故らしいのである。」と皮肉り、稗を推奨する政府の要請を揶揄していた（後記）〈前掲・植松『稗畑』二二五頁〉）。

(130) 前掲『昭和十八年の名簿』。

(131) 山口誓子「長谷川素逝の作品」〈前掲・山口『俳句諸論』二七七―二七九頁〉。

(132) 山口誓子「戦争俳句集を讀む」〈前掲・山口『夜月集』三〇―三二頁〉。

(133) 長谷川は、昭和一二年八月に砲兵将校として応召するが、一三年一二月に戦病で京都陸軍病院に入院、一四年六

月退院、以来自宅療養、その間、旧制甲南高等学校教授になる（樽見『戦争俳句と俳人たち』同上、八四頁）。長谷川と『砲車』については、大野林火「解説・七草田男・波郷・楸邨」（『現代俳句体系・第三卷』〈角川書店、昭和四七年八月、三五四―三五六頁〉）の中の「戦争と俳句」の項目の中でも言及され、戦後『定本素逝句集』を編纂する際、長谷川は『砲車』の中から三句しか採録しなかったことが紹介されている。

(134) 山口誓子「月のある随筆」（前掲・山口『海の庭』一八八頁）。

(135) 山口誓子「宰相山雑記（五）」（前掲・山口『海の庭』二二七―二三二頁）。

(136) 富安風生「前線俳句・銃後俳句」（前掲・富安『草木愛』一三八―一三九頁）。

(137) 『朝日新聞』昭和一八年三月一〇日。

(138) 樽見博は、長谷川の戦争句について、彼の代表作『砲車』を戦争俳句の中で最も有名な句集と位置付けながら論及し（樽見『戦争俳句と俳人たち』〈トランスビュー、二〇一四年、七六―八四頁〉）、さらに昭和一八年一月刊の長谷川の『俳句誕生』についても紹介している（同上、三三〇―三三二頁）。

(139) 玉井清「日中戦争下の反英論―天津租界封鎖問題と新聞論調―」（『法学研究』第七三卷第一号、平成一二年一月）を参照のこと。

(140) 前掲・植松「枯山水」、三〇七頁。

(141) 前掲・植松「枯山水」、三五四頁。

(142) 「屠る」という文言への注目は、玉井清「鬼畜米英への道」（前掲『写真週報とその時代・下』）も参照のこと。

(143) 『大政翼賛』、昭和一六年一二月一〇日、第四十九号（『大政翼賛運動資料集成第一巻』柏書房、一九八八年、所収）。

(144) 水谷まさる「小國民文化に就て」（『日本学藝新聞』昭和一七年四月一日）。この英米文化放逐の提言は「撃ちてし止まむ」の運動の中で実現していくことになる（前掲・玉井「鬼畜米英への道」）。

(145) 室生「日本の朝」（『読売』昭和一七年三月一日）。

(146) 『朝日新聞』昭和一八年一月二三日。

(147) 『朝日新聞』昭和一八年二月六日。

(148) 『朝日新聞』昭和一八年二月一四日。

(149) 『朝日新聞』昭和一八年二月二六日。

(150) 『朝日新聞』昭和一八年二月二八日。

(151) 前掲・玉井「撃ちてしまむ」の始動」。

(152) 日本文学報国会の常任理事で、事務局長として実務を取り仕切っていた久米正雄は、日中戦争後、東京日日新聞社の学芸部長であった。日本文学報国会の法人認可申請のために提出した履歴書の中でも、同社の社員であることを確認できる（「久米正雄の履歴書」〈関西大学図書館編『日本文学報国会 大日本言論報国会 設立関係書類 上巻』、一一七—一一八頁〉）。日本文学報国会の事務局長として活躍する久米は同会の対外交渉役を務めることになるが、その中には新聞を始めとするメディア対応も含まれていたであろう。主要三大紙の中でも『毎日』が、文壇の戦時動員を積極的に推進した背景に、久米の存在を欠かすことはできないであろう。